



個室タイプの山小屋「白山雷鳥荘」(by N. Toga)

表紙の言葉<白山雷鳥荘>(母 典雅/19期)

2012年にオープンした「白山雷鳥荘」は、県営の「白山室堂」や「南竜山荘」とは異なる民営の山小屋である。なお、県営といつても、指定管理者たる(一財)白山観光協会(南竜は白山市地域振興公社)に管理・運営を委託しており、雷鳥荘はその観光協会が建てたものだ。白山では初の個室タイプで、4.5畳と6畳が各3室あり、4.5畳を3人が1泊2食で利用した場合の料金は計37,600円。食事は他の室堂宿泊者と同じながら、部屋にはテレビがあり、水洗トイレ・シャワー(有料)も使えるなど、たいへん人気がある。

雨風をもテントでしのぎ、避難小屋泊に嬉々とした昔を思えば隔世の感を禁じ得ないが、他の山小屋が快適になり、大規模で老朽化が進む室堂にあっては、これも時代の流れだろう。ちなみに名称は、1948年、白山観光協会が設立記念に建てたのが「雷鳥荘」であり、09年に再発見されたライチョウ(1羽、16年現在も生息)にもあやかっているようだ。

http://www.kagahakusan.jp/file/murodou/muro_sisetu.htm1

表紙写真：母 典雅（19期）表紙題字：中川 晃成（23期）

「ベルクハイムへの憧れ、四度（よたび）。」

20期 久富 象二

小屋作業ではたくさんの仕事がありますが、皆さんとてもよく働かれます。

草刈。小屋にカマはもちろん草刈り機を用意しています。草刈り機は上手・下手を別にすればわりと簡単に使いこなせます。

水場の整備。ノズル一つで炊事用と水洗トイレの水が勢いよく流れ出る設備は優れものです。いつも感心させられます。

登山道の整備。ナタとカマで草木を刈り払えば眠っていた野生が甦ります。自分で切り開いた道を歩くのは快感以外にありません。

大工仕事。小屋の構造を理解して、補修作業を行えるのは少数のプロの方たち。私は釘1本打てません。

小屋の掃除。カメムシの死骸や何かのフンやあれやこれや、ほうきで掃いても掃いてもキリがありません。掃き掃除をした後でもぞうきんで拭くとぞうきんがすぐ真っ黒になります。

食事の準備。黒崎シェフの周到な準備と手際の良さでスムースに準備が進められます。特製カレーは正に絶品。来春は山菜の天ぷらに挑戦！

今年度の小屋作業は、県道を封鎖するゲートの鍵が更新され管理が厳格になるという困難(?)や、新道整備が進みベルクハイムからの往復では時間がかかるため、テント泊で伐開作業を行うという困難を克服して、継続して着実に前進を図ることができました。

ゲートの鍵の件では、森市会議員に大変なご尽力をいただきました。今後は県道工事の早期終了を促す手立てを練らねばなりません。新道整備ではチェーンソーを使いこなす上田さんをはじめOB諸氏や、ワングルのDNAを確実に受け継いだ現役諸君に奮闘いただきました。毎回鎌倉から駆せ参じてくれる松下さん、ごくろうさま。高三郎まではあとわずかです。

ますます入りづらくなった倉谷で、高三郎の登山道を整備して、その意味はあるのか？

封鎖された県道の行き着く先に、ベルクハイムがあり整備された登山道と高三郎がある。机上では思い至らない憧れの世界を諸先輩たちが創り上げ、引き継いだ者たちがさまざまに思いを重ねさせてきた。まずはそれでよいのだと私は思います。

ベルクハイムへの憧れは、まだ続きます。

目 次

(頁)

○B会会長 あいさつ 「ベルクハイムへの憧れ、四度(よたび)。」	20期 久富 象二
【小屋作業に寄せて】	
2016年 小屋作業に参加して	20期 松下 和隆 1
ワンゲル山小屋 (山小屋の歌)	13期 渋谷 代志枝 7
【○B会活動便り】	
近畿支部活動報告	11期 加藤 忠好 8
東海支部活動報告 「猿投山 PW」	17期 渡邊 和文 18
「追悼＊坪井陽典 君」	16期 川端 俊朗 19
関東支部活動報告 「いわきの会津農園での宴会」	18期 横井 恒雄 20
スキー合宿報告 「O B スキー合宿に参加して」	15期 上馬 康生 22
【同窓会便り】	
一期一会の会 2016 in 小淵沢	11期 青柳 健二 24
15同期会 故きを温ねて故きを知る in 金沢	15期 高村千佳子他 26
【現役より】	
主将あいさつ	主将 60期 村居 龍樹 30
夏合宿 表銀座	60期 清水 大輔 30
夏合宿を終えて	61期 天木 智晴 31
北アルプス夏合宿	60期 梅北 浩志諒 32
夏合宿 北海道	61期 内田 大智 34
【投稿の頁】	
冬の北八・夏の南ア	6期 合津 尚 36
立山砂防トロッコ PW	11期 加藤 忠好 38
香港～Manhattan with Alps～	17期 小島 敬 40
自分の身は・・・	15期 舟田 節子 43
およそ30年ぶりの穂高岳山行記録	24期 仲村 正一 47
仏陀の道を旅する	8期 篠島 益夫 49
近年の、外国での記憶から：承前（昨年の続きを）	11期 長岡 正利 51
【事務局から】	
編集後記	54



2016年 小屋作業に参加して

20期 松下 和隆

日程

- ・2016年春、5月21日～5月23日（2泊3日）
- ・2016年秋、10月1日～10月3日（2泊3日）

参加者

- ・OB（11名）

大島良治（13期）、辰野隆義（13期）、吉本良治（13期）、渋谷代志枝（13期）、上馬康生（15期）、奥名正啓（15期）、北川隆次（16期）、上田喜久雄（17期）、久富象二（20期）、松下和隆（20期）、黒崎敏男（22期）

- ・現役（7名）

田所耕平（58期）、田村隆典（58期）、山路遼太郎（59期）、太田和幸（59期）、入江明寛（59期）、松尾優海（60期）、天木智春（60期）

小屋作業、継続危うし！

小屋作業が、できなくなるかもしれない！？

2016年の小屋作業は、こうした危惧から始まりました。この春、当局（県央土木総合事務所）は、県道207号線の通行止めを「より一層強化する」とし、寺津ゲートの看板に、この旨を告知しました。



通行止め強化の告知！（寺津ゲートにて）

当局は、コピーが出回っていたゲートの鍵を全て無効化し、原則、特段の理由が無い限り、例外なく通行を禁止する、との強い姿勢を打ち出していました。その背景には、本年5月4日に島根県で発生した、落石による死亡事故がありました。

それを受けた緊急措置のことです。我々は通行条件の緩和に向け、これまで小屋作業に理解を示してくれていた金沢市スポーツ振興課に、協力をお願いしました。しかし「県が危険だと言うのに作業を依頼するわけにはいかない」との冷たい返答。登山道整備の社会的貢献を訴えてみるも、「登山者が入山できないという現状において、道整備に今さら何の意味があるの？」と、更に更に冷たい返答。もし僕がここに同席していたら、逆切れマグマが沸々と湧いてきてドカーンと机叩くところです。しかし我らがOB関係各位の皆さんには違っていました。大人の折衝をねばり強く続け、結果、「特段の理由」の中に我々の小屋作業も何とか含めてもらうことに成功したのです。ご尽力いただいた森市議、梅氏（19期）、そして久富OB会長に惜しみない賛辞を贈りたいと思います。今後は、当局が決めた「鍵貸し出しフロー」に従って鍵を借用することとなります。以下の2条件をクリアする者だけが通行できます。

- ・ゲート内に土地・建物等を所有していること
- ・その管理を必要としていること

管理とは、用水の管理、墓の管理（墓参り）、小屋の管理等を意味します。我々のベルクハイムも該当することとなりました。この条件明示により、従来ならば黙認されていた、登山やハイキング、山菜取りなど、個人の趣味を目的とする通行は完全にシャットアウトされてしまいます。犀奥から市民の足が、ますます遠のいていきます。

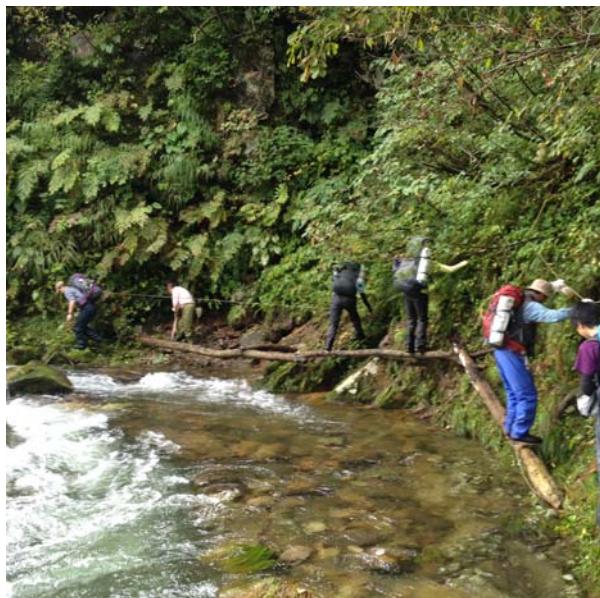
ちなみに、地元獣友会の皆さんにさえも、通行許可はおりなかったとのことです。



寺津ゲートを通過して、犀川ダムへ
(秋の小屋作業集合写真)

水没した石畳

犀川ダムの湖畔を2時間ほど歩き、倉谷川の吊り橋を渡って旧倉谷廃村を過ぎると、ベルクハイムはもう目と鼻の先です。やっと着いたという安堵感も束の間、水没した石畳が現れます。かつては石積みの堰があり、その上には美しい石畳が続いていました。しかし今ではここが、ベルクハイム道中で最大の難所になっています。淵に吊るされたロープを頼りに、丸太棒の上をカニの横這いで歩きます。スリリングで面白いとは、とても言えたものではありません。老若男女、誰もが安全に楽しく行けること。それが、ベルクハイムの必須条件です。抜本的な対策が、今や必要かと思われます。



水没した石畳（旧測量計付近）。最大の難所



巨大なヒキガエル

ロープを頼りに丸太棒の上を進みながら足元を見ると、巨大なヒキガエルがいました。リアルに巨大なのです。こぶしひつ分ぐらいはあるでしょうか。このカエルを見ていると、ジョージ秋山の漫画を思い出します。彼の意欲作「日本列島蝦蟇蛙」（歪んだ性に苦悩する青春物語）に出てくるカエルにそっくりです。どうせなら二匹重なっていてほしかった。ちょっと不謹慎だったでしょうか。ゲロゲロ。

ベルクハイムの補修

ひと冬を越したベルクハイム。無事に建っているかちょっぴり不安でしたが、大丈夫でした。今年もまた、青い屋根とエンジ色の壁に包まれたいつもの姿で、僕らをしっかりと出迎えてくれました。到着早々、まずは水の確保です。隣の沢に向いて水源をセッティングします。バルブを開きます。冷たい水が勢いよく吹き出て来ます。持参したビールやサイダーが気持ち良さそうに桶の中で泳ぎ回ります。まずはこれで一安心。荷揚げの疲れも癒されます。次に別のバルブを開きます。今度は小屋の右横でジャーという威勢の良い音。昨年完成した水洗トイレに水が供給された音です。初参加の学生から歓声が上がります。うちのトイレより立派です！



ベルクハイム前にて（春の小屋作業集合写真）

春の小屋作業では、柱の交換に着手しました。永年の豪雪に耐えてきた柱は、もはや限界を迎えており、一部の柱に至っては下部が腐って中空になっています。早めに手当てをしないと、近い将来、豪雪に押し潰されるかもしれません。杉角材が6本に、基礎固めをするセメント5袋。その他

重たそうな資材がどっさりです。約300kgの資材を皆で手分けして運びました。杉角材は長くて、一人では運べません。二人一組になってエッサホッサと運搬しました。こんな感じですね。



名コンビ、奥名さん、吉本さん

盛り塩、山の神に安全祈願

新道の登り口でパンパンとお祓いをするのは、今回初参加の上田さん（17期）。チェーンソウや草刈り機の指南役として、今回の小屋作業から参加して頂きました。入山時にはいつもこうやって、山の神に安全祈願をするそうです。



山の神に安全祈願（新道の登山口にて）



盛り塩

上田さんはザックからビニール袋を取り出し、そこから白い粉をひとつまみして地面に盛ります。麻薬ではありません。塩です。これで「盛り塩」の完成です。厄除けの効果はてきめんでした。お陰様で、今回は負傷者もなく全員無事に下山することができました。

満月の夜に、鶴鳥（ぬえ）が鳴く

新道の奥深く、ベルクハイムと高三郎とのちょうど中間点あたりに砺倉分岐があります。そのちょっと手前付近（標高840m）に新しいテント場を切り開きました。ベルクハイムからの通いで道整備をするには、あまりにも遠くなりすぎたからです（片道で2時間かかる）。その対策として、2張り程度のテント場を新道の傍らに新しく確保しました。



テント場の確保、2張り程度

テント生活なんて、もう何年振りでしょうか。久しぶりに山奥で、本格的なテント生活を2泊に渡り楽しみました。気心の知れた先輩OB諸氏、青春まったく中の若い現役生らに囲まれて、楽しいひとときを過ごしました。伐採機材を運搬するため、食料はかなり軽量化しました。それでも、上馬さん仕込みのレトルト食品はどれも旨く、大変満足のいくものでした。ストレス・フリーな時空の中で、大いに笑い、大いに語らいました。青春の追体験、まさに、ここにあります。

そして夜のとばりが降りる頃、それは、やって来ます。「ヒョー、ヒョー」という鶴（ぬえ）の鳴き声。不気味です。テントの周りで響き渡ります。ちょっと怖いです。テントの外に出られない。小キジをしばし、我慢してました。



満月の夜、不気味に鶴鳥（ぬえ）が鳴く

倒木（ヤマタノオロチ）との格闘

新道の前半部には、道を塞ぐ巨大な倒木が4本ほど横たわっています。中でも最大級の倒木が「ヤマタノオロチ」。僕が勝手に名付けた巨大な倒木です。一本の太い幹から、数本の幹が分岐するその姿は、まさに「ヤマタノオロチ」そのもの。それは、我々の行く手を完全に塞いでいました。チェーンソウの使い手、われらが上田氏は、軽快なエンジン音をたてながら、まずは分岐した首の部分を次々と切り落としていきました。そしてよいよ最後に本体切断です。エンジン音は唸り声に変わり、回転するチェーンからは、火花がほとばしります。それでも幹の心は硬く、ついには切り落とすことができませんでした。たかが倒木、されど倒木。巨木の心核は相当に硬いと知るべし。次回にて仕切り直します。来年こそは退治したる。ヤマタノオロチよ。



倒木（ヤマタノオロチ）と格闘

草刈り機に、覚醒

草刈り機は、面白いです。雑草を刈るだけの、単純な道具ではありません。先端に何を付けるかしたいで、モンスター・マシンに変身します。今回は金属製の丸鋸を装着しました。これにより、笹はもちろんのこと、太めの灌木（直径5cmぐらい）までが、面白いように切れちゃうのです。強力です。相当な効率アップです。登山道整備において、これは強力なツールとなります。

ただし、強力な反面、使いこなせるようになるまでには、半日ぐらいの練習が必要でしょうか。灌木への進入角度を見誤ると、草刈り機が跳ね飛ばされます。その反動はすさまじく、自分の体が捻じれてしまうほどです。しかしこれを制御しきることは、快感です。灌木がスパッと切れた瞬間は、まるで、暴れ馬を乗りこなしたかのようです（乗ったことはないですが…）。

春の小屋作業では、上馬さん（15期）が奮闘しました。草刈り機の潜在能力を十二分に引き出し、灌木を切る腕前はもはや「匠」の域です。あえてここでは、師匠と呼ばせていただきます。上馬さんの頑張りで、高三郎のピークも視野に入ってきました。お疲れ様でした。

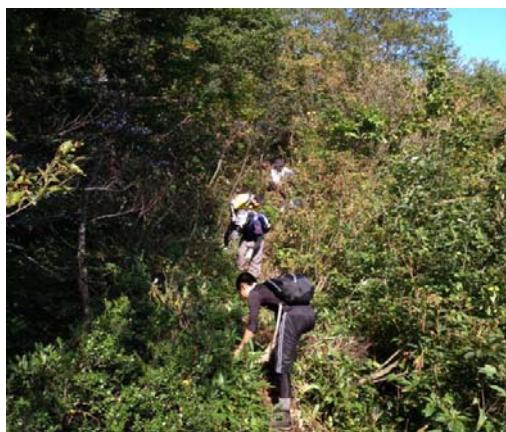
秋の小屋作業では、上田さんと僕がこれを引き継ぎ、道整備の現場を（旧道と新道との）分岐前（標高1000m）あたりまで進めました。現状、高三郎ピークまでは、距離にして残り1km弱かと思われます。



草刈り機で効率アップ

労働の喜び

草刈り機でブッシュを切り開いた後も、それをフォローする作業は必要です。草刈り機で粗刈りした箇所は、数センチ程度の茎が、地面の上に残ってしまいます。それが踏みつけられると、ツルツル滑ってとても歩けたものではありません。こうした刈り残しは、やはり鎌やナタ、ノコギリなどで、きめ細かくフォローする必要があります。地道な作業ですが、この作業を今回は、現役学生諸君が一生懸命やってくれました。若さと人海戦術にものを言わせてダイグイと作業を進める彼らを見ていると、草刈り機に勝るとも劣らない頼もしさを感じます。若者よ、秋晴れの下、汗をかこう！



秋晴れだ、汗をかこう



労働の喜び

全国から集った若者たち。岐阜、山形、栃木、山口、佐賀と、出身県もバラエティです。昨晩はテントの中で「ケンミンSHOW」をやりました。ご当地自慢で盛り上りました。彼らに囲まれて、

ジジイ達もけっこう楽しみました。

次の写真は右から、山路くん（岐阜出身）、太田くん（山形出身）、入江くん（栃木出身）、天木さん（山口出身）、松尾さん（佐賀出身）です。背後に見えるは高三郎。あともう少しだ。またみんなで頑張ろうね！

感想と今後について

（1）水没難所の迂回路

ベルクハイムは、老若男女、誰もが、安全に楽しく行ける所。そうあるべきです。ところが現在は、測量計周辺の道が水没したことにより、この理想が大きく阻害されています。この難所のため、ご高齢のO Bにおいては、ベルクハイムへ行くことを断念される方もおられます。この残念な事実を考慮すると、迂回路等の対策を早く講じることが急務かと思われます。多少時間がかかるとしても、安全で確実にベルクハイムへたどり着ける別ルート。そのような迂回路が必要ではないでしょうか。現在補助的に使っている「高巻き道」を本格的に整備して、ベルクハイムの裏へ直接至る道にするというのも、一案かもしれません。できれば資材も運搬できるよう、工夫したいものです。

（2）テント場の前進

作業現場は、旧道との分岐近くまで来ています。そのため、今回設けたテント場からさえも、片道1時間はかかるようになりました。よって、可能ならばテント場を更に前進したいところです。第2テント場の候補地としては、砺倉分岐を過ぎた標高988m地点あたりを目論んでいます。周囲はブッシュですが、切り開けば、2張り程度のテント場が確保できそうです（次回要調査）。ここからは、高三郎が間近に見えます。

こんな感じです。



草刈り機にもいろいろあると思いますが、今回は2種類の草刈り機を使用しました。1台目は、従来からベルクハイムに置いてある赤い草刈り機（仮称：赤1号）。2台目は、今回新たに黒崎氏（22期）が導入した青い草刈り機（仮称：青2号）。春の小屋作業では、赤1号が大活躍しました。秋の小屋作業では、（赤1号も使いましたが）青2号が大活躍しました。青2号の方が、若干優れているようです。その理由は次の通りです。

① 可搬性が良い

主軸が2つに分解でき、ザックに入れて運搬できる。この条件は、新道前半の急登で重要となります。両手が空いていないと、大変きつい。赤1号は分解できなかったので、手で持って運搬しました。死ぬ思いでした。上馬殿、黒崎殿、お疲れ様でした。

② 歯の切れ味が抜群

赤1号の歯よりも半径が一回り小さい。そのため回転数が速く、威力があります。灌木の隙間にも入れやすく、横に切ったり縦に切ったり自由自在。操作性が大変良いです。

青2号型の草刈機器がもう1台あれば、作業効率は随分と向上します。草刈り機2台を使用し、ローテーションしながら進めば、次回こそはいよいよ高三郎到着かもです。2班体制が望ましい。1班2名で構成し、最低でも4人（2×2）の有志が集まれば、2班体制が可能です。



赤2号（草刈り機）の運搬は、きついよ！
(新道を下山して。上馬さん、黒崎さん、お疲れさま)

（1）ポスト新道整備

日本山岳会石川県支部の西嶋さんからの情報です。倉谷川を挟んで、ベルクハイムの対面に大倉山（1005m）があります。そこまでは、登山道が、刀利ダム方面から立派に整備されているとの

ことです。高三郎ファンの皆さん、その雄姿を見たいがために、わざわざ整備されたとのことです。

一方、大倉山から出島（犀川ダム湖畔）までは、距離にして約1500m。この間は現在ブッシュですが、ここを整備すれば、我々が今整備している新道とリンクします。さすれば高三郎への登山道が一本通しで完成し、市民の皆さんにも新道を使ってもらえます。更に、ちょっと視点を変えれば、湯涌温泉方面からも、高尾山、順尾山を経由して高三郎へ登山できる可能性が出てきます。高三郎と湯涌温泉がリンクすれば、下山後、温泉に浸かれる。そんな贅沢な登山道も、夢ではないでしょう。

もちろん、現在通行止めの「県道207号線」が開通すれば、それに越したことはありません。しかしその目途は、今のところ、全く立っていません。ならば自分達で今できることやってみよう。それが本提案の動機です。



県道207号線の工事現場、いつ終わるのだろうか？

（2）お疲れさま

最後に、とびっきりの笑顔をもって、本稿を終わりにしたいと思います。



春の小屋作業の折には、いろいろお世話になりまして、ありがとうございます。小屋へ行くことについての鍵等、皆様がいろいろご苦労なさっておられますこと、伝え聞いています。さて私事ですが、小屋作業の折のことを、所属しております短歌結社に歌にして寄せました。

ダムに沿い三時間かけて辿りしに蒼き湖面をボートの五分

ダム沿いの道はあれぞと示されど エンジン響かせボートに疾走

エンジン音ダムに響けど水浅く魚影を見つつ水路を選ぶ

吊り橋の赤は褪せれど渡る揺れ ダムに離れし村はすぐそこ

若き日に踏みし石いま苔むして標の遺る離村倉谷

栗の花匂う廃村柾の道若き日の記憶標に覚ます

崖に沿い丸太二本を渡すのみ 足踏み外せば冷たき川に

白き泡木末高きに池めがけモリアオガエルは命滴す

高台の木末に見ゆる山小屋 ワングルの日々どつとあふれ来る

廃村の古材で建てし山小屋 修繕繋ぎ五十絆て存る

失いし仲間の命「僕」の碑花を手向ける山男いて

鍵開けば板の間に夜の蠅燭の跡・大鍋の棚



川に下り雪融け水に飯盒の米研ぎし日は新入部員

両の手の飯盒の水零さぬよう上りしに今 ホース溢るる水
セメントや木材担ぎ往復し小屋作業する男等の汗

背のザツクに担ぎしマジックは草刈り機 谷間に寝す男のロマン
草刈りの音止めば枝に夏鳶谷を隔てて郭公の啼く

峰と峰蜘蛛糸のごと一文字に機影光らせジェット機渡る

男らの作業に謝する言葉なく懐かしき小屋の床拭うのみ
作業せぬ身の程知らずが男らの担ぎし糧を食む 一人前

ランプ灯し山小屋酒場盛り上がり山の水引き缶ビール浸す

特注の「関の孫六」大鉈を供とし四人新道造りへ

飲めぬにも夜の闇長しと酒持たせ新道作業の仲間を送る

山中にテントの一夜過ごすと ふと青春のテント泊想う

愉しさと懐かしさに胸膨らむに小さなリュック身を縮め辞す

熊撃ちの男三人青シートの「別荘」に憩い珈琲タイム

記念にと貰いし写真「高三郎山」茄子紺に雪残る山肌

(四月十五日大倉山から撮影)

鮮やかな瑠璃色の鳥訪れて瞬に飛び去る 佳き日はたまゆら

近畿支部報告

1. 姫路・書写山Pw

- ・実施日 2015 11/21(土)
- ・コース 姫路駅=(バス)=書写駅～(東坂)～山上駅～仁王門～摩尼殿～白山峰～三之堂～奥の院～根本薬師堂～山上駅=(ロープウェイ)=書写駅=姫路駅
- ・参加者 (15名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫⑧、篠島⑧、島林⑩、藤井⑩
高田⑩、畔山 §⑪、加藤 §⑪、楠屋⑭
宇野 K⑯、高村⑯、間所 §⑯

・報告

書写山円教寺は、西国三十三箇所の札所のうち最大規模で西の比叡山とも言われる山岳寺院である。三之堂あたりは、よく映画・ドラマに使われている。また、紅葉の名所で実施日を初日とする3日間は重文の特別公開もあるとのことで、10期藤井さんが企画してくれこととなった。



〈書写山最高峰、白山峯の白山社にて〉

9:20 姫路駅に集合、バスでロープウェイ書写駅へ移動。一人は腰痛のため、楽ちん手段で山上駅に向かったが、残り14名は10:28に東坂より登山開始した。標高差は200mであるが、なかなか登りがいのある尾根である。

紫雲堂跡を過ぎ約1時間で山上駅に到着。

ここで入山料を払い境内へ。まず、鐘撞堂で一人ひとりが志納金を納め、それぞれの思いで鐘を撞いた。京都や奈良では鐘楼が多いが、なかなかこんな機会がないとのこと、それも山寺なので一層趣深い。

境内といっても本堂までは山道である。仁王門を過ぎ、塔頭の一つである十妙院に着いた。ここで特別公開重文の狩野永納襖絵と庭の紅葉を鑑賞した。ここより湯屋橋を渡ると舞台造りの摩尼

殿が聳えている。



〈摩尼殿と石垣〉

このあたりの石垣は、山上にありながら、まるで城郭のようである。平安時代には、世俗を離れ山に籠もる僧こそが徳のある高僧という風潮があったようで、関西では山上に比較的大きな寺院が散在している。性空がここに住み、和泉式部が帰依したというのが円教寺である。以降、この地方の歴代藩主の庇護を受けてきた。明治以降の神仏分離令や廃藩置県の影響で、経済基盤を失った寺院の多くが衰微・消滅した中で、大都市姫路の近くにあり、西国の札所であったためか、明治以降もうまく残ってこられたのであろう。

石階段を登り舞台から、しばし紅葉を眺めた。ここが最高地点が白山峯というのも我々にとってうれしい。白山社でのんびりと昼食とした。ここに拝殿も少し変わっている。どうやら昔の風俗が残っている感じがした。

食後、三之堂に向かった。コの字型に建ち並ぶ大建築物は庄屋である。しかも三つの建物の趣きが全く違う。展示室となっている食堂内を見物し、奥の院、金剛堂、展望台、薬師堂と回った。金剛堂では特別公開である堂内の天井画、飛天を鑑賞した。



〈三之堂の一つである食堂〉

展望台では、例によって恒例の羊羹の大中小に興じた。三之堂や奥の院のある西谷から、摩尼殿の中谷を経て、かつての馬車が通っていた道から元の鐘撞堂に戻った。人々で紅葉が迎えてくれ、

足を止めて鑑賞した。下山はロープウェイ。紅葉と歴史・文化財、関西の山行きは奥が深い。

姫路では、今日の一日を反芻すべく御幸通りの居酒屋で打ち上げ。通りのミニルミナリエにちょっぴり酔った人もいた。

2. 洛西・小塩山 PW

- ・実施日 2015 12/13(日)
- ・コース 南春日町バス停～大原野神社～(小塩山登山道)～紅葉地～小塩山分岐～(淳和天皇陵道)～正法寺～南春日町バス停
- ・参加者 (11名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫⑧、島林⑩、藤井⑩、畔山⑩
加藤 §⑪、楠屋⑭、間所 §⑮、三宅⑯

・報告

小塩山には燃えるような一角がある。その場所、その時期でないと味わえない美しさである。しかも、山道の途中で、かつ斜面と来ているから一般的ではないのも頷ける。



<大原野神社にて>

そこは、10期島林さんの散歩エリアであるが、彼は以前より足を痛め歩けない日々が続いている。それと現在の近畿支部メンバーの高齢化からしたら、そこを訪れるとだけで頂上へ行く必要もないだろう。ピークハンターの百名山とは全く逆の山行企画ができあがつた。

各自の便利さに合わせ、JR 向日町駅、阪急東向日駅からのバスの車中で集合。9時半に南春日町バス停を出発した。

紅葉の名所、大原野神社に立ち寄り今日の無事を祈願するとともに紅葉を楽しんだ。時期はやや遅く、足元は赤の絨毯を敷き詰めたようであった。このあたりは花の寺、正法寺、金蔵寺と紅葉の名所が多い。しかし、京都のような人ごみはなく、どちらかというと昔の風景が残っており、花の寺

の参道を過ぎ、猪除けの柵を開け、山中に入る。谷筋の道がやがて山麓を巻くようになると道が急になってきた。12月というのにすっかり汗をかいてしまった。関西では冬が低山歩きの最盛期であることを実感した。

小塩山というのは、アンテナが林立している山であるが、山頂には淳和天皇陵がある。仏教が定着していた時代だけに、天皇は死後火葬とし、陵墓は不用、西山に散骨をと遺言した。散骨は小塩山でなされたようだが、江戸幕末に尊王思想とともに幕府により天皇陵が造営されることとなった。

途中車道と出会うが、自動車乗り入れ禁止の道である。車道からは京都の方が開けていたので休憩、この山にちなんで、泉州の住人が鹿の糞状の豆菓子を持ってきた。河内長野市小塩町製造のものだという。このPWにふさわしい粋な計らいである。

豆菓子を食って元気が出たところでまたも急斜面に挑む。しばらく歩くと紅葉の大きな林に出た。先日の強風で大半の紅葉が落ちたらしくすっかり明るくなっていた。以前に訪れたときは燃えるような紅葉であったが、今回は紅葉の絨毯であった。ここで長い昼食時間となつた。

更に登り車道と合流。頂上をカットし淳和天皇陵道を下った。粘土質の急なよく滑る道だった。竹林を過ぎ正法寺に出た。ここで、花の寺に立ち寄るグループとのんびりバス停に向うグループに分かれた。

花の寺は西行が出家した寺として有名である。桜と紅葉の名所でもある。ここも紅葉にはやや遅かったが、人影も疎らで、晩秋の風情が漂っていた。

下山後、例によって向日町駅前の居酒屋で今日の一日を振り返った。



<下山後の反省会>

3. 鷲峰山 PW

- ・実施予定日 2016 1/30(土) 雨天中止

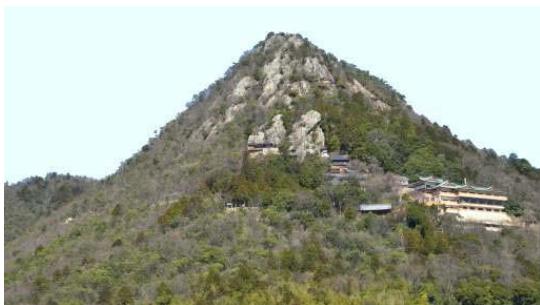
4. 鷺峰山再挑戦Pw

・実施予定日 2016 2/13(土) 雨天中止

5. 太郎坊登拝Pw

- ・実施日 2016 3/12(土)
- ・コース 近江八幡駅＝太郎坊宮前駅～
太郎坊宮～赤神山～箕作山～十三仏～
参道口～市辺駅＝近江八幡駅
- ・参加者 (12名) <§：夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、島林⑩、藤井⑩、高田⑩
加藤§⑪、高村⑯、間所§⑯、三宅⑯
- ・報告

太郎坊宮とは面白い名前である。太郎坊ととうのは強大な靈力を持った天狗であり、太郎坊山はその住処という。確かに、この岩山はそのような雰囲気を持ち、この宮は、今でも相當に栄えているようである。ここを登ろうと10期藤井さんが企画してくれた。



〈赤神山（太郎坊山）〉

参加者全員無事に近江八幡駅10:12発の近江鉄道に乗ることができた。太郎坊宮前駅で下車。無人駅の駅舎の出口には注連縄が張ってあり、その上の天狗の面が我々を睨んでいた。駅を出ると太郎坊山への一直線の道があり、途中に幾つかの鳥居があった。麓からは社殿がある中腹まで石階段で登るようだ。

天狗と神社というのはちょっと結びつき難い。これも神仏混淆を無理に分離したための産物なのだろうと思う。案の定、最初の階段を登った所に赤神山成願寺という寺があった。天狗と所縁の深い鞍馬寺と同様、天台系の寺院のようだ。

さらにヒイヒイいいながら階段を登り絵馬堂、一願成就堂、太郎坊宮と回った。それぞれに展望が良いので、一服しながら登ることができるのがあり難い。かくして約100m登ってしまった。社殿の裏に夫婦岩という縦割れの巨大な岩があり、悪心を抱く者が通ると挟まれるそうだが、思った

より隙間がひろく緊張せずに通ることができた。



〈太郎宮本殿〉

龍神舎からは箕作山に向け登山道に入った。約15分で鞍部に出た。稜線をUターンすると赤神山に到着。昼食とした。先端は神域で行ってはいけない。次から次へと人が来るので山頂を明渡し、箕作山に向う。途中の休憩舎で羊羹の大中小に興じた。箕作山で小休憩し、さらに西南の稜線に進む。小さなピークを越え岩戸山からは下り坂。岩戸山は磐座のようで、十三仏は窟屋というから、昔からの信仰の対象となっていたようだ。

ここからの下山道にはずっと石仏が並んでいた。観音さんとお地蔵さんだろうか、二体が対になっているものが多かった。男と女のように見えるが、観音さんは現世、お地蔵さんは来世で、それぞれ救済してくれる仏様だ。願いは願主でないとわからない。

下山し、しばしの休憩後、市辺駅に向け歩いた。円墳のようなきれいな形をした紅粕山の裾を巻き、船岡山の東を通った。このあたり一帯は蒲生野である。「野」が最後につく地名というのは宮中の狩猟場という意味らしい。ここは万葉集にも出てくる場所だ。

「あかねさす紫野行き標野行き

野守は見ずや君が袖振る」

「紫草のにほへる妹を憎くあらば

人妻ゆゑに我恋ひめやも」



〈左小脇山、右赤神山を背景に〉

荒地だったこの地も、平安期には「狛の長者」が用水を引き水田地帯にしたという。

船岡山を回るとここにも阿賀神社があった。背

後には磐座らしいものがあった。太郎坊宮も正式には阿賀神社である。太郎坊は明治期までは修驗道で栄えた聖地である。神仏分離でも信仰を集めていた太郎坊なら寺院として充分存続出来たろうが、滋賀県は行政官が激しく廢仏毀釈を行った県。特に修驗道が攻撃にさらされたその時代にあっては、神社として残るのが無難だったのかも知れない。太郎坊宮（阿賀神社）が村社に列せられるのが明治7年。参拝者の多さからか、その後とんとんと社格が上がっていったようだ。二つの阿賀神社の関係は・・？歴史的な想像がふくらむ楽しい山行きでもあった。

6. 天王山 P w

- ・実施日 2016 4/9(土)
- ・コース JR 山崎駅～山崎聖天～
旗立松展望台～天王山山頂～柳谷観音～
土御門天皇陵～長岡天神～JR 長岡京駅
- ・参加者 (19名) <§：夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫 §⑧⑩、島林⑩、藤井⑩、高田⑩
畔山 §⑪、加藤 §⑪、森川⑪、楠屋⑭、上馬⑯
宇野 §⑯、金井⑯、間所 §⑯、三宅⑯



<長岡天神にて>

・報告

天王山。いわゞもがな明智光秀が三日天下となった古戦場である。今回は、福井に居を移す間所夫妻に対し、「引き籠もり防止壮行会」を兼ねた山行である。JR 長岡京駅付近で宴を催すべく、15期三宅さんが下山から逆算して出発点を決めたという。

集合地 JR 山崎駅には 9:45 には全員集合した。山崎は摂津と山城の国境、古代の「山崎関」の跡地に關大明神があり、その境内には一等水準点があった。今でもここの小さな溝が京都・大阪の府境となっている。

出発は 9:50、山崎聖天に向かった。正式には妙音山觀音寺といつて、ご本尊は現世利益の觀音様であるが、それよりも金儲けの方の歡喜天（聖天）

の方が人気のようである。桜は地面をピンクに染めていたが、散り残りの桜を賞ることもできた。



<旗立松展望台にある酒解神社の鳥居>

ここよりしばし急登、喘ぎあえぎ旗立松展望台までたどり着いた。旗立松とは、戦意高揚のため、秀吉の旗印である千成瓢箪を掲げた松であるそう。ここより坂もやや緩くなり酒解神社に至った。

酒解神社の正式名はやたらと長い。それはともかく、延喜式に記載された格式の高い神社であったが、いつの時代か祭祀が途絶え、所在が不明になつたらしい。一方、ここには中世より山崎天王社があった。祭神は牛頭天王である。神仏分離令では仏教系の神である牛頭天王は認められない。京都の祇園社も八坂神社と改名され、牛頭天王が廃されたのと同様、この山崎天王社も明治 10 年に所在不明だった酒解神社とされたようである。明治維新というのは、それまでに宗教内容までをも政治的に変えさせた時代といえるのだ。

天王山はその弾圧にもめげずに行き残った山名なのだ。嬉しくなった。

天王山には 11 時半頃到着。広々とした山頂で昼食となつた。展望は利かないが気持ちのよい場所である。食事後稜線を 30 分歩いた場所で、恒例の羊羹の大中小に興じた。一旦、浄土谷の方へ下山。



<柳谷觀音にて>

さらに車道、旧道により柳谷觀音に向かつた。

桜には遅かったが境内いっぱいの紅葉の木に秋の見事な風景を想像してしまった。

伽藍は斜面に建っている。三宅さんの案内で奥の院に行く。堂内に入るのに靴を持てという。言われるままに靴を持ち、水平や階段の回廊を進み、色々で趣の異なる庭園を賞で進むと、そのまま下の本堂まで出てしまった。なんと面白い仕掛けなのだろう。

柳谷観音からは本格的な下山。長い車道を歩いた。途中、土御門天皇陵、長岡天神や八条池に立ち寄った。遅咲きの桜と八条池の風情がなんとも良かった。

急ぎの下山であったが、JR長岡京駅前の居酒屋には17時半到着。約2時間半に亘る宴に酔いしれた。間所夫妻も近畿支部残留の意を強くしたようだった。



〈桜花爛漫の八条池にて〉

7. 座頭谷 P w

- ・実施日 2016 5/14(土)
- ・コース 宝塚=(阪急バス)=知るべ岩～座頭谷～ハニ一農場～大谷乗越～譲葉山～行者山～東觀峰～逆瀬台=逆瀬台駅
- ・参加者 (10名) <§：夫婦で参加>
金岩⑤、篠島⑧、伊豫 §⑧⑩、藤井⑩
畔山K⑪、加藤 §⑪、楠屋⑭、高村⑮
- ・報告

太閤秀吉は無類の有馬温泉爱好者だった。有馬温泉までのルートは今の宝塚から生瀬に至り、武庫川の支流である太多田川を遡上する。この太多田川というのが曲者で、実は大阪平野北部に走る有馬・高槻断層帯に沿っている。この断層破碎帯の脆い風化花崗岩が蓬莱峡や座頭谷という世界的にも珍しいといわれる険しい特殊景観を形成したのだ。今回の山行は11期加藤が企画した。座頭谷の名称は、有馬に向かおうとした座頭が

間違ってこの谷に迷ったことに由来している。それを知った秀吉が旅のために立てた道標が「しるべ岩」である。



〈万里の長城のような砂防堰堤にて〉

9時宝塚集合。すでに有馬温泉行きバスは満員になっていた。しるべ岩でなんとか下車。他の1パーティを先行させ、万里の長城を模したかと思われるような長い砂防堰堤で休憩。9:50に出発した。当然有馬温泉の方面ではなく、座頭が迷った方の谷である。

しばらくは谷の右岸の木陰道を歩くが、4段堰堤を越えると景観は一変する。どこを歩いてよいか迷うような広河原となる。さらに進むと谷がやや狭くなり、針状の岩峰が両側に聳えるバッドランドとなる。谷は複雑に入り組み、岩峰といつても非常に脆く座頭が迷ったのも頷ける地形である。

立ち止まり景観を楽しみ、約1時間遡行し昼食とした。このような場所だから堰堤越えも多い。下見に来たはずであったが、当日も一ヶ所で間違ってしまった。2~3分のロスだったから許してもらえるだろう。

北アルプスのピークに立つが如きの写真を撮ったが、意外と出来が良くなかった。



〈座頭谷上部の景観〉

バッドランドを過ぎると樹林の急坂になる。木々が視界を遮っているが、崖にトラバース気味の道がつけられているのだ。登りきると上部は平坦面、ハニ一農場に着いた。

ハニ一農場は閉まっていたが、しばし休憩のの

ち大谷乗越に向かった。車道、それも2車線道路だから緊張した。大谷乗越から六甲東縦走路に入る。縦走路だけあって、これまでの道に比べ実に快適である。また、土曜日だから大勢の人が歩いていると思ったが、平日かと思われるほど人が少なかった。譲葉山を過ぎてから右手中行者山へ向かった。東縦走路も良いが、単調なのと塩尾寺からの長く急な舗装道路は足を痛めるからである。

一旦、行者山との鞍部まで下り行者山へ上り返す。展望の良い東觀峰で長い休憩をとった。3/13に亡くなった小川さん宅の方角に向かい黙祷を捧げ、小川さんの大好きだった羊羹の大中小で興することにした。

東觀峰から逆瀬台への急斜面も思ったほど時間がかかるなかつた。下山時刻 16:15。バスは我々待っていたかのように、乗り込むやいなや出発した。



〈行者山東觀峰にて〉

谷歩き、車道、縦走路、バッドランド、森林、展望地、変化の多い山歩きだった。阪急逆瀬川駅改札口で 16:40 に解散した。

8. 六甲高山植物園 P w

- ・実施日 2016 6/4 (土)
- ・コース 六甲ケーブル下～(油コブシ道)～山上駅
(バス)=六甲高山植物園(見学)=下駅
- ・参加者 (15名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、黒崎⑧、伊豫§⑧⑩、島林⑩、
藤井⑩、畔山§⑪、加藤§⑪、宇野§⑯、
金井⑯、高村⑯、三宅⑯
- ・報 告

体が暑さに馴れていない6月は企画者泣かせの時期だ。ならば六甲山上の高山植物園だ。企画は10期藤井さん。8期黒崎さんと連絡が取れ、植物解説もOKという。

高山植物園 12 時半頃集合とし、山上まではケーブルでも山歩きでも良いこととした。

意外や意外、油こぶし登山口でもある六甲ケーブル下には14名が集合した。

出発は9:30、いきなり六甲の断層面の急斜面を登る。滴るような汗をかき途中何度も休憩、10:45 油こぶしに到着した。



〈近代化産業遺産の山上駅にて〉

以降はやや緩い稜線気味の道。11:40 山上駅に到着。時間短縮のため植物園までは山上バスを利用した。植物園の東口で金井さんが欠伸し待っていた。

入園料を払い小便小僧の広場で昼食。今日最初のお目当てはキヨスミウツボである。黒崎さんが消えたと思ったら、植物園の職員に開花状況を聞いてきたようだ。それだけではない、職員二人がやって来て立入禁止の場所まで誘導し、蕾を掘り出してくれた。キヨスミウツボというのは寄生植物で、ここではアジサイに寄生しているようだ。花といつてもキノコと見まごうのような形をしている。さらに昨年よく咲いていた場所に案内してくれ、表面の土を優しく除くと蕾がたくさん現れた。開花には約1週間ほどかかるらしい。ここで、黒崎さんと職員は集客のための方策を話し始めた。後日、植物園のニュースで稀少植物の開花ということで取り上げられていたが、集客効果があったのかどうかはわからない。

一足早く多くの夏の高山植物に会えた。それ以外にもヒマラヤの青いケシの裏話やコマクサの定着の苦労話など楽しかった。



〈ニッコウキスグの群落と〉

花盛りの頃は、洋花まで見る気はしない。しかも、長つたらしいカタカナ名はとても覚えられるものではない。園内をグルグル回っているうちにあつという間に時間が過ぎていった。西口を出て、15:40 オルゴール館前から山上バスに乗った。

阪神深江に17時半までに着かねばならない。打ち上げのために畔山さんが中華料理店を予約してくれているのだ。というより、中華料理を食べに、時間つぶしに山上に行った企画のようでもある。最近つとにそのような指向の計画が多くなってきた。

山上バス、六甲ケーブル、神戸市バス、阪神電車と乗り継いで無事17:18に店に到着できた。畔山さん紹介の店だけに、雰囲気もよく、料理もなかなかうまい。そして、奇しくもその日は私の誕生日。ぽろっと洩らした言葉で女性たちが高山植物園の売店で密かに購入していたとのこと。ドライフラワーの可愛いブーケをいただくことになった。



〈神戸・煌々での打ち上げ〉

2時間ピッタリ、飲み、食い、話をし、今日の山行きを終えた。いい一日だった。

9. 六甲シェール道 P w

- ・実施日 2016 9/24 (土)
- ・コース 摩耶山掬星台～(アゴニ坂)～穂高湖～(シェール道・徳川道)～東門～六甲森林植物園～正門＝北鈴蘭台駅
- ・参加者 (13名) 〈§：夫婦で参加〉
金岩⑤、篠島⑧、伊豫§⑧⑩、藤井⑩、畔山⑪
加藤§⑪、楠屋⑫、宇野§⑯、高村⑮、三宅⑯
- ・報告

六甲山にはバタ臭い名前の登山道が多い。トウテンティクロス、カスケードバレー、シュラインロード、アイスロードなどである。六甲山は元来修験道の山だったはずなのに、それをほとんど感じさせないくらいに近代登山の香りが強い。それ

は、神戸が開港地であったことと、街のすぐ背後に六甲山が聳えていたからであろう。シェール道も然りである。その名前の由来は判然としないが、確かに横文字である。



〈穂高湖とシェール槍〉

9月はまだ暑い。通常、近畿支部ではこの時期に山行きを計画しないが、今年はサンマパーティが11月にずれ込んだので、急遽加藤が企画することになった。

困ったときの六甲山。摩耶山から徳川道を経て森林植物園が良いだろう。いや、ちょっと回り道になるが、変化のあるシェール道も良さそう。待てよ。山登りしたい人もいるかも知れない。ならば、集合は摩耶山の掬星台としよう。そのようないい加減さで、下見を済ませて参加者を募った。

最終集合地掬星台 10:30 としたが、1名を除いて全員が摩耶ケーブル駅に集合。10時発の始発ケーブルに乗った。残りの楠屋さんも登山ではない。摩耶ケーブルと間違えて六甲ケーブルに乗ってしまったのだ。気づいたときはすでに遅し。山上バスで摩耶山に向かったとの携帯があった。摩耶山上でうまく会え胸を撫で下ろしたのは言うまでもない。

摩耶山は前衛の山を持たない。ゆえに神戸から大阪まで見渡せる絶景ポイント。当日は残念ながら霞んでいた。ここから穂高湖までは車道を辿る道もあるが、六甲縦走の山道を歩くことにした。



〈摩耶山・掬星台にて〉

オテルド摩耶、天上寺、摩耶別山を越えるとアゴニ坂である。登りではアゴと膝がくっつくく

らいの急坂という意味らしいが真偽のほどはわからない。この坂も難なく過ぎ穂高湖に到着。正面に聳えるのがシェール槍である。神戸の人がいかにアルプスに憧れを抱いて証左である。ピークハンターはシェール槍に、空腹者は昼食場所へと分かれた。

穂高湖周回道路の橋でしばし昼食。ここからは生田川の源流部を下る。下るといつても緩い木陰道である。徒渉も靴を濡らさずに歩けるように飛び石があるし、危ないところには丸太の橋が架かっていたが、バランスの悪い人が落ちたこともあって、今では板橋となっている。今回は一応、登山靴で参加するように連絡しておいた。沢を右に左に渡る気持ちの良い道、そして徳川道と合流した。

徳川道というのは、生麦事件に懲りた江戸幕府が神戸の居留地を避け、六甲山中を迂回するためにつけた大名行列用の街道である。山中を通るために、谷には濡れずに渡渉するための大きな飛び石が置かれていた。



〈六甲山中・徳川道の飛び石〉

と、楠屋さんが谷に落ちたという。見れば、靴がびしょ濡れ。すぐに脱いだ方がいいよ・・というと、ここでズボンを脱ぐわけにはいかないという。どうやら滑って上半身まで水に漬かったようだ。それよりも私は彼女のザックの中のマロングラッセのガラス瓶が気になった。夏だから濡れたくらいで死ぬことはない。先ほど食べた手作りのマロングラッセが上等だっただけに心配になつたのだ。瓶は大丈夫だったよう。ズボンは速乾性、上着を替え、靴の水分は大量のキッチンペーパーで可能な限り吸い取った。

水浴の原因は、水色のお洒落な靴が岩で滑ったよう。身を挺しても守りたいお洒落、それを彼女に見た気がする。その後も、水色の靴は衆人の目を奪うべく飛び石失敗を披露したが、それがなんとも可笑しかった。

徳川道に誘われて入った森林植物園では、オミナエシ、ハギ、ツリガネニンジン、シモバシラの花が待ってくれていた。遅いかと思われたナンバンギセルの花も時期的にはちょうどであった。



〈新開地でB級グルメを食す前の乾杯〉

植物園から送迎バスで北鈴蘭台駅へ。ここで一旦解散としたが、神戸の下町・新開地のB級グルメである黒そば焼きツアーに11名が参加した。昔は、この街の交番の前でもよく寝ていた人を見かけたが、今ではめったにお目にかかるない。神戸は、お洒落な街であるが、庶民過ぎる人もいて、庶民的グルメの店もたくさんある街でもある。

10. H28 サンマパーティ

- ・実施日 2016 11/7(月)～8(火)
- ・場 所 ビラデスト今津 (近江今津)
- ・参加者 (21名) <§ : 夫婦で参加>

金岩⑤、伊豫⑧、高水間⑧、篠島⑧、島林⑩、藤井⑩、畔山 § ⑪、加藤 § ⑪、森川⑪、野村⑫、赤地 § ⑫⑭、上馬⑮、高村⑮、宇野 § ⑯、間所 § ⑯、三宅⑮

・報 告

秋の風物詩、サンマを炭火焼きで食べるという庶民的パーティである。毎年、小川さんが松茸を持って参加してくれたことは、今となっては懐かしい思い出である。

今年6月初旬、15期金井さんと近江今津の山中のカキツバタ自生地を見に行った。要入園料とあったので300円払ったのに花は終りだった。そこで、入園料分を取り返すべくウロウロしているうちに偶然出くわしたのがこの施設だった。山上なのに、芝生が広がり、眼下に竹生島が浮かび、そこにちょっと洒落た可愛い家が建っていた。まるで天空の公園ではないか。しかし季節の良いときは予約で埋まっているとの職員の強気な発言。しかも、繁忙期、休日は五割増しなのだ。でも、魅力的な場所と思った。

10月は各同期会やトロッコPWなどの行事が

詰まっている。実施日を11月の値段の安い平日と決め、前日1棟、当日4棟を予約した。勤労者には申しわけないが、今やほとんどが土日に家族行事にしばられる高齢者なのだ。とにかく初めての場所なので、宿泊下見が必要。福井に転住した間所さんに連絡すると二つ返事でOKが返ってきた。4人で1棟だから金がかかるが仕方ない。参考とすべく、晩飯は国産牛のステーキ定食、朝はコテージまで運んでくれる朝食も頼んだ。

「焼き加減はどうしましょうか?」さすがに近江牛の県だけのことはある。それぞれの好みの焼き加減を伝え、大いに期待した。しかし、出てきた肉は焼き加減とは関係が無いような5mmぐらいの薄さの肉だった。値段が3,500円なのだから、そんなものかと合点できた。



〈天空に立つ2016 サンマP用会場〉

880円の朝食もしかりであった。本番では食事は自分たちで作るべきだと思った。下見は平日だったのに、大学生の団体があり、我々が泊まったのは正六角形の構造をした二階建てだった。しっかりとした建物は、居心地が良い。ただ寝室となる二階の6畳間は、60°の角度を持つ平行四辺形。ここで4人の布団を敷くのにも四苦八苦。パズルを解くくらいに難しかった。本番では、平屋のコテージを狙うべしと心に誓った。

「11月は寒いですよ・・。」その上BBQコーナーの屋根や覆いなどは冬支度のため取り外すというのだ。職員からは、BBQはしてほしくないというオーラが出ている。客のために屋根や覆いの取り外しを少し遅くしてあげようとの気持ちが伝わってこない。

なんとお役所的対応と思ったが、青春時代を雪国で暮らした我々にとっては、寒さは威嚇にはならない。雪の降る中で鍋をした実績もある。それをふまえてBBQコーナーもしっかりと予約した。偶然にも実施日のコテージ、BBQコーナーともにほぼ貸切状態になるという朗報も入手した。いく

ら強気の我々でも11月ともなれば、夕刻前には寒くなることを知っている。さすれば、BBQは遅い昼飯と設定するのが無難だろうと思った。

いよいよ準備も本番となった。いつもの運営委員に声をかけたら、前日からの宿泊しても良いという人が11名となった。この人数なら前日から2棟借りることができ運営はなおさら楽になる。さらに畔山、三宅、間所の3氏が車、調達機材などの提案をしてくれ、大いに助かった。食材の調達は当日の11/7に近江今津の平和堂でと計画したが、当日は臨時休業とわかり、11/6に調達と決めた。

11/6、11時JR近江今津駅に運営委員11名が集合。平和堂で朝食と食材調達。肉は三宅さんの助言で近江牛の専門店で調達した。これで、3,500円のステーキ定食を越えられるはずである。前日の夕食は、宇野さんの「おでん」と森川さんの「すき焼き」が対立したが、人数も多いことだから、それに寄せ鍋を加え3種の鍋を作ることになった。ただし、すき焼きの肉は上等の近江牛を使うので、全員が公平に食べられるように清貧者が鍋奉行を務めることになった。会計も前日と当日とが混同しないように別会計とし、前日は間所さんが、当日は畔山さんが担当した。結果的には、前日の会計で約5,000円の残金が出たので、当日会計に寄付することになった。



〈天空の広場で集う運営委員たち〉

実施日の11/7は前日の強風が嘘のような穏やかな快晴日。朝の散歩のあと、13時にはBBQが開始できるように運営委員男組みは設営、女組は調理に取り掛かった。

送迎バスには宇野さんが乗り込み12時半頃には全員現地集合完了。荷物は前日からの2棟に置き、予定通りの13時、金岩さんによる挨拶、高水間さんによる乾杯でBBQを開始できた。ここでのBBQコーナーはタイル張りの置き台がある立

派なもので、10人が同時にゆったりと座れる大きさである。



〈BBQに興じる人々〉

基本的には自分が食べるものは自分で焼くことを原則に、サンマ1匹、パック入りの100gの肉は直接各自に配当した。特に肉は近江牛だったので、慎重に焼いてくれていたようである。食べるほどに飲むほどにしゃべるほどにあつという間に2時間半が過ぎた。ここで、明日勤務があるという高村さんと宇野あっちゃんは帰っていった。

予定ではBBQのあとはお茶会であったが、風呂は明るいうちの方が良かろうということで、大浴場に向かった。が、園地には誰も居ない。ならば童心に還るのも楽しかろうということになり、遊具で遊ぶことになった。

琵琶湖を眼下に爽快だった。

風呂から出ると外は薄暗くなっていた。

お茶会は本部和室で17時半開始。たくさんの差し入れがあり、何服もいただいた。大勢の人が居るにも拘らず、森川さんの指揮のもと美智代さん知栄子さんの手際よさが光った。

その後は、スライド室で活動報告。スクリーンは大画面。費用はかかったがさすがに迫力があった。畔山さんの近畿支部の活動報告はBGM入りの力作だった。続いて野村さん、篠島さん、金岩さんが発表した。

BBQ終了が3時半頃だったので、小腹がすいた頃、本部では女性の手による特製カレーが夜食として準備された。汗をかくくらいに辛かったが、大根による知栄子特製酢漬けや蒲鉾がちょうど辛さを中和してくれた。

スライド室へ移動すれば酒場、酒飲みだけではなくほぼ全員が集まり、ほろ酔い気分にひたっていた。ふたつの棟を行ったり来たりの企画となつたが、部屋が空くことで後片付けもスムーズに出来、参加者は気分転換にもなり、ゆったりと過ごせた気がする。

翌朝は山にうっすらと霧がかかっていた。紅葉の見頃を迎えた天狗岩まで案内し、10時半頃送迎バスを依頼し現地解散した。

初めてのビラデスト今津だったが、概ね好評だった。費用も1万円徴収したが、2,500円返金することができた。

(文責 加藤 忠好)



追悼*坪井 陽典 君

16期 川端 俊朗

去る10月19日（水）、ワンゲル東海支部事務局長の24期の坪井陽典君が突然亡くなられました。一人暮らしだった彼は、25日（日）に自宅のベットで亡くなっているのを、ご友人が発見されたとのことです。我々の事務局長として、何かと世話をしてもらつておりましたので、突然の訃報に戸惑っているというのが今心境です。

思えば、私が五年前、東京で定年を迎えて、名古屋に戻りました折に、この「やまざと」で、坪井君が寄稿したワンゲル東海支部の立ち上げを呼びかける文章を目にしました。それまで、関東支部でお世話になって、山行きや飲み会に参加させていただいており、「名古屋へ帰ったら東海支部を始めたら」と言われ送り出された私としては、もっけの幸いで、すぐに坪井君に連絡、立ち上げの準備会を経て2012年4月に発足会を開催した次第です。あれから四年半の月日が流れましたが、東海支部はささやかながらも地道に活動を続けてきました。これも事務局長である坪井君の馬力と人柄に負う部分が多々ありました。

仕事面では、正義感が強く、面倒見のいい、優秀な弁護士であったと聞き及んでおりますが、ワンゲル会での彼は、「破れズボンにどた靴はいて」山々を駆け回っていた学生時代から全く変わっていないのではと思うくらい、山での彼は、好奇心いっぱい、よれよれになりながらも、相変わらずよくしゃべり、小さなことにも感動する万年青年でした。鈴鹿の御在所岳での初めてのPWでいきなり靴が口をあけたり、彼の初回提案の三河本宮山PWではどしゃ降りに見舞われてへこんでいたことなど、いろんなことが思い出されます。年2回の飲み会では、いつも背広姿にリュックをしょって現れ、不良コンビとして私と末席で向かい合って、酒を酌み交わしタバコを吸いながらも、多くの先輩諸氏に対しても気さくに語り掛け、かわいがられる事務局長でした。また、忙しい中、関東支部や関西支部の行事にも積極的に参加し、ワンゲルOB会の交流にも一役買っておりました。ただ、仕事が忙しいのか、連絡メールの発信時間はいつも夜中、独身暮らしのためか、酒とたばこが過ぎていたようで、この夏の会でも、白井

先輩から健康に注意するようくぎを刺されていましたところでした。

あまりにも早すぎた彼の死をまだ受け入れることができず、東海支部会員一同、呆然としている状況です。11月には柴田ご夫妻のご厚意で岐阜の別邸「而今庵」で、また12月には恒例の忘年会で、坪井君を偲んで皆で盃を交わし、彼の遺志を継いで五年目への計画を練ろうと思っております。今はただただご冥福を祈ります。



東海支部 猿投山 PW

17期 渡邊 和文

時：2015年10月31日（土）

メンバー：L.坪井（24期）、渡邊（17）

瀬戸市東山路町林道脇駐車スペース 8:53→赤猿峠 9:30→猿投山山頂 11:00（昼食）

11:40→往路を引返し 13:00着。車で海上の森駐車場に移動。駐車場 13:25 発→海上町里山センター→海上砂防池（瀬戸大正池）→北海上川沿→四ツ沢→駐車場 14:53 着。

寒気が来て少し肌寒い秋晴れの日。L.の雨ジンクスは解消。街に近い山のせいいか登山者とランナーの多さにちょっと驚く。二人だけのPWなので語らいながらゆったりとしたペース。「お先にどうぞ」なのでしきりに追い抜かれるがゆとりの気持ち。猿投山山頂から見えたのは白山か。御嶽山は雲の中。瀬戸大正池は池の中の立ち枯れ木が多く、なかなかの景色。オオタカではなく鳶が飛んでいた。

長久手市“ござらっせの湯”で疲れた体を癒す。今回はラムネと栄養ドリンクで喉を潤し帰路に就く。心地よい秋の一日でした。



猿投山山頂（坪井Lと渡邊）

東海支部 中山道・関ヶ原 PW

17期 渡邊 和文

時：2016年6月25日（土）

メンバー：森島（4）、野村（12）、神林（13）、川端（16）、竹本（21）、L. 渡邊（17）

JR 関ヶ原駅集合出発 10時→六部地蔵→野上七つ井戸→10:55 不破ノ関病院向かいベンチ（休憩）→垂井一里塚→垂井宿西見付→垂井の泉→JR 垂井駅 11:52 着→車で池田温泉新館（入浴）⇒13:15 池田町の会席料理「白喜屋」で昼食懇親。15

時解散。

街道歩きとはいえ、梅雨の最中で天気予報は曇り時々雨の状況でPWを催行。幸いにも雨雲は朝方までに去り、JR 関ヶ原駅は曇り。駅前の観光交流館で中山道のパンフレットをもらって出発。しばらく国道21号線脇を、車を気にしながら歩く。やがて国道と別れて松並木の道を歩く。右手に桃配山の徳川家康最初陣地を見て、六部地蔵や山内一豊陣跡、野上の七つ井戸を過ぎて、不破ノ関病院向かいのベンチで休憩。曇りで雨も日差しもなく心地よい。程なくして垂井宿に入る。

中山道で2か所だけ残る一里塚、西の見付、南宮大社大鳥居、垂井の泉を経て、JR 垂井駅に到着。2時間の中山道歩きを楽しんだ。ここから神林さんと渡邊の車で池田温泉に向かう。新館の肌がすべすべする露天風呂で汗を流していくつろぐ。続いて池田町にある神林さん行きつけの「白喜屋」で昼食。小鮎の煮たもの、刺身、鮎の塩焼き、鹿肉のフライ、他デザートまでのフルコースの会席料理を神林さんのおかげの会費で堪能。冷酒もおいしく、飲み水や治水の話、中山道PWを続けよう、もっと高い山、夜叉が池にも行こう、鮎を食べようなどと話が盛り上がり、上機嫌で15時解散となりました。次は暑払いです。



関ヶ原駅前（渡邊・川端・森島・竹本・神林・野村）

2016年10月19日、坪井さんが突然亡くなりました。暑払いに参加し、11月の集まりにも参加予定でした。東海支部の事務局長という大切な仲間でした。きっと浄土でご両親と仲良く語り合っていることでしょう。心よりご冥福をお祈りします。

いわきの合津農園での宴会

18期 横井 恒雄

昨年の秋、6期合津さんの福島いわきの生家を尋ねて宴会をするイベントを実施した。生家を相続して、東京4割、いわき6割の暮らしを始めたが、誰も来ないし、できた農作物を食べにきてほしいというようなことから始まったように記憶している。

1回限りとならず、今年は第2回、第3回と続きましたので、その様子を報告いたします。

第2回合津農園ツアー(4月16、17日)

第1回終了後「来年の春にカタクリと共に待っています。」とのホストのお誘いを受けて、今年の春、4月16、17日に第2回目を実施した。

参加者は6期合津(ホスト)、3期田村、7期四十万、11期青柳、長岡、14期清家、18期横井、20期久富、松下で、前回メンバーのうち二人は都合がつかなかつたが、田村さんが加わって9名となった。

金沢から遠路の久富さんと松下さんを東京で横井がピックアップ、清家さんが青柳さんを自宅に迎えに行き、田村さんは、つくばの長岡さんが会津若松まで迎えに。四十万さんは前回同様、ハーレーで横浜から単独行となつた。合津邸は東京からだと3~4時間かかるし、公共交通機関では、すこぶる不便な所にあり、運転手がいないと成り立たないイベントです。

集合後、今回の趣旨に沿つて、合津さん所有の水石山山麓の山林に、早速、カタクリを見に行つた。



暖冬だったせいか、カタクリは盛りを過ぎてはいましたが、チラホラと可憐な花を観ることができました。相続された山林も荒れ放題だったが、少しづつ手入れをされているとのことで、数年後には、片栗粉が採取できる花園になるだろうとのことでした。

山も一旦、手入れを怠ると元に戻すのは大変なようで、数年後が楽しみ。

今回も野外宴会で、車でスーパーへ買出しに行く者、火をおこす者、芋煮や天ぷらの具材となる野菜を切る者に分かれて準備開始した。2回目となるので大分要領も掴めて、テキパキ?と準備し、いつの間にか、乾杯となつた。

今回はイノシシのスペアリブ、猪鍋、合津さんのご友人がこの日の為に収穫していただいた新鮮なタラノ芽や、合津家の庭で採れたふきのとうの天ぷらなど、春の食材を存分に楽しむことができた。

日も暮れかけた頃、合津さんの二人のご友人が来られ、宴会に参加された。この辺りは「合津」姓が多く、合津さんではわからぬので「タカシサン」と名前で呼んでおられました。ちなみにご友人のお一人は合戸(ごうと)(区長をされている合津忠様で10歳位は合津さんより若いとのこと。



(第2回合津たかしさんと合戸区長の合津ただしさん)

第2ラウンドは前回同様、母屋で青柳さんの設定で映写会。青柳さんの野鳥の写真からはじまり、久富さん、松下さんから小屋作業の紹介、長岡さんから白山の自然とむかしの暮らし、白山信仰にまつわる講演の写真を紹介いただいた。

この長岡さんのプレゼンを見ていた合戸区長の忠様が気に入られ、今年の合戸地区主催の年末

懇親会で長岡さんが講演をされることとなり、地元との関係が深まることとなった。(後述)



(第2回の翌朝、記念撮影)

第3回合津農園ツアー(11月19、20日)

第3回の実施については、参加者が減って、6期合津(ホスト)、7期四十万、11期長岡、18期横井、20期久富、松下の6名となった。参加者が少ないのでどうしようかと迷っていたところ、遠路、金沢から久富さんの参加申し出があり、夏の会津駒ヶ岳PWで松下さんを誘って、第3回目を実施することにした。

今回は、土曜日があいにく雨となり、野外宴会ができずに1次会から母屋での開催となった。ホストの合津さんが大分、事前準備をしてくださっていたので、いつもの通り、合津さんがメモしてくれていた買い物リストを持って四十万さん、松下さん、横井がスーパー、ホームセンターに買い物に行っている間に、合津さんと久富さんで下ごしらえが出来上がっていた。

最初から室内で、ビールで乾杯して宴会がはじまった。まきストーブの前で、芋煮やししゃも等のつまみをいただきながら、合津さんのお父さんの著作物「人間(ひととう)森」をネタに郷土史や、合津家の歴史について(おじいさんは退役将校でわらじを作るのは上手だったが、働くないので、おばあさんが助産婦で家計を支えたことや、合戸郵便局長であった知的なお父さんの話、合津家の家訓等)、ぶっきらぼうに、しかし味のある話をたくさん伺った。

今回も長岡さん持参のパソコンをTV画面に接続して久富さん、松下さんから今年の小屋作業の様子の紹介や、長岡さんの豊富なプロ並みのライ

ブラーイを拝見しているところに、前述の合戸区長の忠さんが来られた。なんでも102歳になられた方の誕生日祝いで朝の11時から宴会だったとのこと。上機嫌で、第2回合津農園ツアーでの長岡さんの話が大変気に入ったので、是非、12月の地区懇親会で話をしてほしいと、何度も同じ話を繰り返された。(出来上がってはいたけれど、なかなか人当たりの良い方です。)

この後、忠さんからも、合津家のエピソードや、合津さんと友人と3人で行かれた会津駒山行(私が企画した会津駒ヶ岳PWの後に、合津さんたちも会津駒に登られた)の笑い話を聞きしながら、最後は2時頃まで飲み会が続いた。

翌日は良く晴れて、定番の炊き込みご飯の朝食をいただいた後、昨年同様、みんなで芋掘り、芋洗いをして、採れたての芋とかぼちゃ、そして干し柿用の渋柿、たくさんお土産をいただいて散会した。



(第3回の翌朝朝食後 後ろに松下さん制作の干柿)

これで、合津農園ツアーは3回実施したが、宿泊することや、東京からは案外距離があることや、車でないと不便なことや、何度も訪れたいと思う観光名所があるわけではないなど、いろいろネックはあります。それでも、たまには新鮮な野菜を食べて、一杯やりながら、先輩の昔話や味のある話を聞く、地域の人とも交流する夜を過ごすのも悪くないと思う人がいれば続くのではないかと思います。興味のある方はご一報ください。(なお、写真は誰が撮ったのかわからないものがありますがご容赦ください。)

OBスキー合宿に参加して 15期 上馬 康生

今年も恒例の野沢温泉スキー合宿に参加しましたが、早いものでいつの間にか、この集いは19回目になりました。スキーの上手くもない私がこの集いに参加するようになったのは、知っているOBの方々が何人かおられたことと、スキー合宿が始まる数年前に、職場の仲間10名ほどで初めて来たこのスキー場の印象がよかつたことからでした。

野沢温泉スキー場のよいところは、初心者から上級者まで楽しめる様々な種類のゲレンデが、麓の柄沢ゲレンデから標高1650mの毛無山山頂までの間の方々にあり、それらをゴンドラやリフトでうまく結び付けられていること。そしてブナ林やダケカンバ林があり、その霧氷や樹氷の中を滑ることができること、山頂からは妙高山・火打山や北アルプスほかの大展望が広がっていることなどでしょう。

参加当初は不安な気持ちで滑っていましたが、経験豊富な諸先輩の、ていねいな指導やレベルに見合ったコース取りのおかげで、楽しく滑ることができますようになりました。また、皆さんのスキーのレベルも様々で、上手くなくても気になりませんでした。各自がそれぞれのスキーを、決して無理をすることなく楽しんでいるのです。おかげで、長年参加しているうちに、少しほとんど上手く滑れるようになった気がしています。

天気が悪いと早めに宿にもどり、また初めからスキーはあきらめて、外湯めぐりをしたり温泉街を歩いたりと、それぞれ思い思いに過ごせるのも野沢温泉ならではです。いつもの宿である「リゾートハウスふるさと」は、料金の割に食事のレベルは高く、連泊しても違った料理が出てくるので、味にうるさいメンバーにも好評です。そのうえ自家製のどぶろくが出てきたり、外から帰ってくると薪ストーブに温かい甘酒があつたりと、サービスのよさも申し分ありません。そしてアフタースキーはワンゲルOBならではのもので、職業、専門性、趣味など様々な分野の、年齢幅の広い集まりゆえに、話題に尽きることなく、夜遅くまで各地の酒や菓子を飲食しながらの歓談が続きます。

前書きが長くなりましたが、記憶を頼りに今年

のスキー合宿を私なりに振り返ってみます。

2月20日（土）金沢を7時過ぎに、辰野さんの新車エスティマで村田さんと3人で出発。本来なら舟田さんも一緒のはずが、事前トレーニングの志賀高原でのスキーで怪我をされて珍しく不参加となりました。暖冬で北陸道、上信越道には雪はなく予定通り10時過ぎに宿の「ふるさと」に到着。宮島さんがちょうどスキーを担いで出発されるところで、我々3人が出る時には松下さんも一緒となり4人で出発しました。やまびこゲレンデで滑り、12時30分頃に、いつものレストラン湯ノ峰（閉鎖）の隣の集合場所である上ノ平ロッジで、スキーをした全員が顔を合わせることができました。

今回は2月18日（木）から22日（月）までの間に、1泊2日から3泊4日までの日程で、直前に不参加となった山中さんを除く17名の参加でした。田村さん（0期）・植木さんが再度一緒に参加、井上（11期）さんが久しぶりの参加、そして村田さん（7期）、野村さん（8期）、山村さん（8期）、伊藤さん（9期）、保田さん（9期）、青柳さん（11期）、上村さん（11期）、野村さん（12期）、宮島さん（12期）、辰野さん（13期）、山西さん（13期）夫妻、松下さん（20期）、上馬（15期）と、いつものメンバーが集まりました。



（上ノ平ロッジ前で、スキーをした全員集合）

昼食後、集合写真を撮り、ここで井上さんと山西夫妻と別れました。午後は上ノ平、やまびこゲレンデでは雪、下の方では雨となりました。小降りでスキーには問題なく、4人一度パラダイスゲレンデから日陰ゲレンデまで下ったところ、下部の雪質は悪かったので再びやまびこへ上がり、そこを中心に滑りました。ゴンドラ山頂駅のレス

トハウスやまびこで休憩して、天気が良くないので早めにスカイラインを下り 16 時前には宿に到着しました。なお、早い日程で来ていた人たちは、降雪後の好天で雪質もよく、きれいな樹氷の林の中での心地よいスキーを楽しめたようです。



(毛無山山頂で (2月 19 日))

18 時から日本人ばかりで満員の食堂での夕食後、テーブルを借りて村田さんが準備してこられた抹茶タイムとなり、歓談が続きました。宿の関係者にも振る舞われ、交流ができました。20 時過ぎから恒例のスライドによる報告会。私が白山のライチョウの発見から現在の状況と、いかにして白山に来たなどを話し、松下さんは春と秋の山小屋作業の様子について、現役生と一緒に作業したことを報告。青柳さんが山中さんに代わって関東支部いわき合津邸での PW の様子などを、野村さん (12 期) は私と行った笈ヶ岳山行と、山中さんと一緒にパタゴニアツアーについて話されました。最後に田村さんが、日本再生のためにと管見 13 項目を話された後、締めの歌が始まろうと



(田村さんの力の入った語りを聞く)

しましたが、23 時をはるかに過ぎていたので他の部屋への配慮で中止となりました。皆が床に就いた後も、松下さんと田村さんの話が長く続いていました。

夜中に雨が少し降ったものの、翌 21 日 (日) は曇り空のまづまづの天気。やまびこゲレンデはガスの中であったので、湯ノ峰ゲレンデを中心に戸田さん、野村さん、保田さん、青柳さん、上村さん、野村さん、辰野さん、松下さんと私の 9 人で滑りました。例によって保田さんが、一人ひとりの滑りをビデオ撮影していました。その後、水無ゲレンデで滑った後、レストハウスやまびこで昼食。午後は、野村さん (8 期)、上村さん、野村さん (12 期) が帰られ、残った者で滑るが、寒い上に急斜面はアイスバーンとなっていてゲレンデ状態はよくありません。最後まで残った保田さん、青柳さん、辰野さんと私の 4 人で、やまびこ D コースで滑り、レストハウスやまびこで休憩。15 時頃に早めに下りようと外に出ると、青空が出てきて霧氷のダケカンバやブナが素晴らしい、空には彩雲がきれいで、青空の下もう一度滑り、スカイラインを下って行きました。下部は雪不足で進入禁止となっていて、途中から柄沢ゲレンデへ巻いて下りました。その日の夕食は戸田さん、保田さん、辰野さん、私の 4 人だけでしたが、他にオーストラリアと東南アジア系の 3 組 10 人余りが泊まっていたことが後で分かりました。

22 日 (月) は曇り空で、ゲレンデ上部はガスの中であったのでスキーは取りやめ、保田さんを見送り、3 人で温泉街を歩きました。源泉や湯澤神社、健命寺などを訪ねたり、温泉卵と温泉まんじゅうを食べたり、みやげを購入したりと、ゆっくり過ごし、12 時頃に宿を出て金沢に戻りました。

毎回、準備と進行をしていただいている青柳さん、記録映像の力作を届けてくださる保田さん、運転ほかでお世話になっている辰野さんをはじめ、参加者の皆さんのおかげで楽しい思いをさせていただいていることに大変感謝しています。ワンダーランドの先輩後輩の垣根を超えた繋がりの中で、いろいろと学ばせてもらえる有意義な集まりに、新しいメンバーが増えることを願わずにはおられません。20 周年を機に、まだ参加したことのない方も、一度、顔を出していただければ、そのよさを、きっと分かってもらえると思います。

一期一会の会 2016 in 小淵沢

11期 青柳 健二

- ・参加者：井上史・和、向・沖継、片田、高田、加藤・智美、畔山、森川、杉森・悦子、窪田、芝田、上村、北川、山口、青柳 計 18 名
(下線はゲスト)

昨年の戸隠での同期会の後、次回幹事となった関東支部の北川・青柳は小淵沢に住む芝田さんを訪ねた。そこで次回の会は、小淵沢で開催することを決定、2016 年のプロジェクトが始動した。

・実施日：2016 年 10 月 23 日(日)～24 日(月)

・会場：山梨県北杜市小淵沢

ガーデン・コテージ ポリアンナ

会場となったポリアンナは、芝田さん宅と同じ町内にあり、樹々が茂り四季折々の花が咲く広大な庭に、母屋、レストラン棟、コテージ、が配置された素敵な宿。このレストランで時々昼食をとる芝田さんの紹介で、紅葉の盛期に貸切りかつ大サービス価格で利用させていただいた。

小淵沢は八ヶ岳高原南麓にある標高 1000m の天空リゾート、澄み切った大気のもとで「50 年前に出会った仲間」と楽しく過ごしましょうと参加を募ると、ゲスト 3 名を加え 18 名もが参加する会となった。

10月23日(日)

有志 14 名で、まずサントリー南アルプス天然水ガイドツアーに参加する。工場見学とはいえ実際に見れたのは、水が充填されたペットボトルの梱包作業だけ、あとはビデオでの説明に終始して、ちょっと物足りない感もした。でも、さすがサントリー、広大な森の中の工場で、ペットボトルを自作し、無菌室で完全自動での充填作業、水の味や細菌の有無をチェックする検査工程などの完璧な安全対策を知ることができた。試飲では、新製品のヨーグルト味などを飲み、ウィスキー博物館の見学も出来て大変勉強になった。この天然水は、甲斐駒ヶ岳に降った水が花崗岩質の大地を 20 年かけて濾過されたものとのこと、美味しいのは当然だと納得。

宿に入る前に、甲州街道の台ヶ原宿で開催されている骨董・クラフト市を見る。市が終わる時刻に訪ねたことで、駐車場の心配もなく、その一端

を知ることが出来た。私は、翌日この宿場で生信玄餅をお土産に買って帰ったが、これは美味でした。



午後 5 時前にポリアンナに入る。近くの延命の湯や宿の風呂で汗を流して暫し寛ぐ。この宿は、オーナー夫妻が 35 年の歳月をかけ一から創り上げた宿であり、広い庭は奥様が、建物と家具や庭に置かれた彫像などはご主人が、今も日々整備を続けられていて、そこに佇むだけで心が和むのであった。

午後 6 時から、レストラン棟で夕食会。オーナーの息子夫妻が作る自慢の創作ディナーを頂きながら楽しく歓談する。地の食材を使った前菜、魚料理、肉料理とコースが続く間に、欠席者の近況報告や初参加の山口さんの 40 何年分の長い挨拶などで盛り上がる。シェフも鹿が小海線の電車を止めた話などで場に加わり、美味しい料理と甲州ワインなどを味わううちに、瞬く間に二時間が過ぎていた。



8 時過ぎから、場を母屋のリビングに移して宴会となる。まず、大型テレビで 50 年前の KUW V 時代の写真を映写して当時を懐かしむ。夏合宿や PW、春山合宿、山小屋コンペ、追出しコンペ、立山スキーなど昔の写真が次々と写し出されるのをワイワイと評論しながらの鑑賞。皆若かったなー、髪がフサフサで、ぜい肉なしのスマートぶ

り。デカいザックを背負って良く歩いたものです。新人ながら針の木や剣の雪渓を登るなど無茶な山登りもやったものだなど感慨深く往事を偲ぶ。かようにして50年前に知り合い、共に熱く活動した仲間達と今また楽しく語り合える幸せをシミジミと感じ入るのだった。ゲストの向沖継さんは、金大を出て県の教員採用試験に落ちたことから、今の幸せが始まったと、幸子さんと出会い、山登りに目覚め夫婦で百名山に登ったことなどを語ってくれた。本当に縁とは不思議なもの、それまで全く縁がなかった者達が、ただ山登りが好きなだけで知り合い、50年間も付き合い続けることが出来るのですから。嬉しいことです。

いつの間にか10時を越していた。明日の予定や、来年は関西支部が幹事を担当すること等を、酔いの回る中で決めて、宴はお開きになった。

10月24日(月)

翌朝は、目を覚ますと雲一つなき快晴であった。朝の陽が輝く7時前から散歩に出る。八ヶ岳と南アルプスの絶景を求めて歩いた。気持ち良い!!



8時からレストラン棟で朝食。有機野菜サラダに卵焼き・フルーツ・ヨーグルト・パンが一皿に盛られ、観るからに美味しい。コーヒーに紅茶をお替りしてユックリと楽しむ。その後、母屋リビングのベランダに場を移し、朝日を浴びながら歓談。紅葉し始めた庭を散策するのも楽しい。各自気ままに天空リゾートの朝の大気を吸い込み、元気をもらう。

10時に、夫婦・部屋別・全員お揃いで記念写真を撮り、ひとまず解散とする。予定がある、高田さん・山口さん・片田さんの3名は帰路についた。

残った15名は、車に分乗して、ウェスタン牧場に向かう。ここは、甲斐駒ヶ岳を正面に観る観光牧場で、馬や山羊さん達と戯れる。3名が引き馬

で乗馬を楽しんだ。その後、甲斐小泉の三分一湧水を見学。湧き出る清水と先人の知恵に大いに感心する。



この湧水は、一日約8500tもの清水を噴出し、武田氏が農業用水を3つの村に均等に分配させるため、湧出口の分水桟に三角石柱を築き、三方向に流水を分岐させたと言われている。この清水を使った蕎麦を食べる予定が、団体貸切でアウト。小淵沢の道の駅で、手打ちの延命そばを味わい、売店でお土産を買って、2時前に解散となった。

その後、加藤夫妻はポチアンナにもう一泊し、野辺山のJR最高地点まで行き、畔山さんは富士山を真近に観たいと甲府に泊まったようだ。この日は、素晴らしい秋晴れの好天気でしたから、これもラッキーだった。翌日は、一転午後から小雨が降ったとのことですから、我々の日頃の清らかな行いに天の神が応えたのだろう、感謝・感謝!!

なお、その雨で富士山が初冠雪したとか。(観測史上最遅) 今年は、紅葉も遅れ気味、雪を被った八ヶ岳・南アルプス・富士山が観られなかつたのは、唯一残念ではあった。

今回は、紅葉には今一步ではあったが、好天気に恵まれ、素敵な宿で美味しい料理と心温まる接待を受け、全員が大いに楽しんだ二日間であった。この場所を永住の地と定めた芝田さんを羨ましいと思うとともに、この度の歓待に感謝し、また季節を変えて小淵沢を訪れたいと思う。

50年前に今はなき金沢城内のKUWV部室にて出会った仲間たち。これが会える最後になるのかもと「一期一会の会」と名付けて毎年開くことにしてから4回目の会は大盛況で終えた。皆が古希を迎えることになるが、まだまだ元気だ。あと10年、20年は続けられるだろう。まずは来年、関西方面でまた会いたいものである。

15期同期会 故きを温ねて故きを知る in 金沢

15期 高村 千佳子 他

*日 時 2016年 10月9~10日

*場 所 金沢東山地区

宿泊 石川県青少年研修センター

*参加者

上馬夫妻 宇野夫妻 奥名 坂尻夫妻 佐野
舟田 増田 松下 松縄 松林 間所夫妻
三宅 高村 比田井母娘3 (以上20名)

*スケジュール

8日 松縄・上馬 駒帰からダム往復

若葉で前夜祭 松縄 宇野夫妻 佐野 奥名
坂尻夫妻

9日 研修センター集合→天神橋で着物組と合
流→観音院 「まいどさん」による古地図巡り

(七稻地蔵→宝泉院→慈雲寺→蓮昌寺) →町家
塾カフェ→(着物組は舟田家) →研修センター

10日 研修センター→卯辰山墓地公園→坂尻氏
別邸→森八・落雁作り→黒門緑地→城内散策→
玉泉院丸庭園→白鳥路→山楽で昼食→坂尻氏
別邸で解散

【参加者総網羅メール】

*高村千佳子さんより 10月11日発信

楽しい充実2日間をありがとうございました。
奥名さん 幹事お疲れ様でした。ありがとうございました。 坂尻さん・知恵さん いつも別
荘提供ありがとうございました。坂尻さん宅の
コーヒーが、ランチの時のものより美味しかっ
たです。 節っちゃん 着付けから、ご主人の
車での移動ありがとうございました。お天気も
お昼から回復して雨にも遭わずによかったです。
思ったより、着物で歩くのも疲れませんでした。
三宅さん 心細い道中同行ありがとうございました。
帰りは素敵な白人の美女と
英会話したのかな…?

増田さん すっかり回復され記憶力のすごさ
に圧倒されています。 松下さん いつも穏や
かできっと優しいお医者さんでしょうね。初め
て高村に金沢で松下さんを紹介された日が昨
日のことのように蘇ります。 佐野さん いつ
までも青年のような若さの秘訣を教えて下さい。
宇野さん あっちゃんまたサンマバーテ
イーで会いましょう。 上馬さん 敏江さん
いつもプレゼント (女性だけかな…)
ありがとうございます。



昔はここを走ったものだね。 天神橋にて

また素敵な絵楽しみにしています。 間所さん 美智代さん いつも娘を優しく温かく見守って下さりありがとうございます。 松縄さん 今回はゆっくり堪能できましたか? 昨年はお世話になりましたがとうございました。 比田井さん 久しぶりにお会いできてうれしかったです。これを機会にぜひ常連になって下さい。

また、高村のお墓参りもスケジュールに入れて頂き、お参りありがとうございました。きっと高村もたくさん集まって賑やかなので、びっくりして喜んでいることでしょう。娘もこんなにたくさんの人が来て下さると思ってもいなかつたようです。「いいお友達に囲まれて、お母さんは幸せだね」って喜び安心したようです。

金沢も毎年来ていますが、改めて奥が深いと思いました。お寺もお庭も歴史がありますね。また、松林さんが後半加わって名ガイドにより一層楽しめました。増田さん 来年はお世話になります。みなさんにお会いする日を楽しみにしています。

【前日行動・前夜祭関連メール】

*坂尻忠秀 10月6日発信

台風18号は夜半に強風を残して去っていき、今日の午前中は家の周りの落ち葉の片付けに追われていました。8日の前夜祭は、松縄、宇野夫妻、佐野、奥名と坂尻2人の計7名で、6時から小立野のおでん屋「若葉」でやる予定です。おでん、どて焼き、茶飯、ベニヤ板の料金札…懐かしい!翌9日の午前中は、医王山へでも行って来たいと思っています。土日の降水確率が50%~60%なのでやや心配ですが、皆さんに会えるのを楽しみにしています。

*上馬康生 10月6日発信

我が家前の溝と玄関や車庫内も、近所から飛んできた落ち葉でいっぱいでしたが、何とか処理を済ませました。

8日は今のところ朝6時半に松縄さんを金沢駅に迎えに行き、駒帰から犀川ダムまで往復して、熊走の集落へも行く予定です。天気が悪い場合は、全コース歩くかどうか、当日判断します。午後3時頃には坂尻さんの所へ送っていけると思います。私はそのまま自宅へ戻ります。

9日は来客がありますが、午後1時には集合場

所へ行けるようにします。

*松縄宏 10月8日発信

8日15時頃材木町の金沢別邸に届くように宅配便を昨夜発送しました。今夜新宿「バスタ」発金沢行き深夜バスで明朝未明金沢着です。昨日5万分の1地形図を書店で探して、「鶴来」と「城端」だけ入手できました。もう少し早く地図のことを気付くべきでした。明日は天気今一ですが、駒帰からダムまでの往復をして秋色を楽しみます。上馬さんよろしくお願ひします。

*坂尻忠秀 10月11日発信

恒例の15期会でしたが、前夜祭から「若葉」で昔日にタイムスリップして楽しく始まりました。翌日は何も見えない医王山の夕霧峠までドライブして二俣経由で帰ってきた頃から、天候もよくなりいよいよ本番!

今回は比田井さんが参加してくださったこと、みんなで高村のお墓参りに行けたことなどで、また一段とあの頃が近くなつたように思いました。

普段、金沢は良く知っているつもりでしたが、今回歩いてみるとまるで知らない所ばかりでとても興味深かったです。奥名幹事長に感謝です!

松縄総務部長のいう「ヒマ、カネ、ケンコウ」が手元にある限り、この楽しい同期会が継続することを願っています。

*宇野潔 10月11日発信

新たな発見の「金沢」を楽しみました。奥名幹事以下、準備とお世話、有難うございました。比田井さん家族の参加もうれしかったです。

前夜祭の「若葉」で、久しぶりの懐かしい味についつい飲みすぎ、9日午前は死んでいましたが、皆の顔を見たら復活しました。

また、久しぶりの「山の歌」が良かったです。さすがに「人生の並木道」は歌わなかったけれど…。ボケた写真もありますが、許して下さい。来年は増田君の企画です。皆に元気をもらって、今日からまた、出稼ぎの旅です。

*松縄宏 10月13日発信

楽しい企画ありがとうございました。奥名幹事さんには全く訪ねたことのない東山界隈をあり

がとう。近いうちに自分もボランティアガイドさんにもう一度お願ひして、金沢の魅力探しに行きます。

今回の僕の目的の一つが昔探しでした。秋色の駒帰からダムまでを自分の足で訪ねたかったのでした。上馬さんのお力添えで念願叶いました。往復5時間の道が懐かしかった。何とか天気がもって高三郎に会えました。その夜も坂尻さんにお願いしていた若葉での金沢おでんをたらふく。満足です。金沢城址の解説、松林さんありがとうございます。

相模原に戻り仕事に追いまくられながら、仕事ができる幸せにも感謝しています。来年もお会いできる日を楽しみにしています。

【メインテーマ 故きを温ねて故きを知る】

* 奥名正啓 10月13日発信

～今回 訪れた卯辰山寺院群～

金沢には主要な寺院群として、寺町、小立野、そして卯辰山の3つがある。この中でほとんど訪れたことのない所が、卯辰山寺院群であった。

今春、近世資料館で「前田家の子どもたち」と題した企画展があり、お宮参りや着袴の儀においてこの卯辰山の観音院や明王院などが大きな役割を果たしていたことを知った。さらに南北に走る寺院群にはそれぞれに様々な歴史を刻み続けてきた。

今や一大観光地と化したひがし茶屋街は平日でも人が溢れかえっているが、そのすぐ横に連なる寺院群は人も少なく静かなたたずまいの中に、これまで話題に上ることの少なかった歴史を感じさせてくれる。

珠姫ゆかりの觀音院（真言宗）

米騷動で獄死した靈を慰める七稻地蔵の寿経寺（浄土宗）

大きな蓮如像と浅野川沿いや小立野台の眺めが素晴らしい宝泉院（真言宗）

現在は料亭「山乃尾」となって今昔の違いを見せる明王院あと富田流剣法の富田（とだ）家の五輪塔のある慈雲寺（法華宗）

見上げる大仏釈迦如来と明かり取りの蓮昌寺（日蓮宗）

など実に様々である。まだまだ多くの寺院が続き、その楽しみはまたの機会としよう。

【無事帰宅、総括】

* 間所新一 10月10日発信

お世話になりました。楽しい時間をありがとうございました。新しい金沢だけでなく、昔からの金沢にもこんなに風情のある所が有るんだと再認識した今回の15期会でした。サイフを持たずに来る人、落雁作り体験で借り物のエプロンの中に指輪を忘れる人、ホテル・チェックアウト時の鍵騒動、最後は坂尻邸にブレザーを置き去りする人も現れ、年齢に見合った楽しい同期会でした。

金井へ 今回は参加できず残念でした。差し入れの〇〇（最高級大吟醸酒）2割3分は二次会会場で美味しく頂きました。ありがとうございます。

* 三宅毅 10月11日発信

ゆったりした2日間楽しかったです。学生時代にはまったく行ったこともない東山エリアの散策は新鮮で、新たな金沢発見でよかったです。企画に感謝します。帰りのサンダーバードは全席満席でした。連休とはいえ金沢人気は凄いですね。私の周りは欧州から来たガイジンのツアーピーの人達で驚きました。隣席は若い白人女性でしたが、遠慮なくビールと水割りを楽しみながら帰りました。奥名さんお世話になりました。

* 比田井 妙佳（長女） 10月11日発信

金沢では大変お世話になりました。早速に、素敵なお写真を送っていただきありがとうございます。母にも伝えます。

みなさん、本当に素敵なお方ばかりで、私も父の新しいことが知れてうれしく思いました。今後もお世話になることがあるかと思いますが、その時はどうぞよろしくお願いします。

* 佐野哲雄 10月19日発信

（「みなさん、『大卒らしく』感想を送信しない」の脅迫メールに対して）

遅くなりましたが、添付します。中卒くらいにはなっていると思います。また一緒に山に行きたいですね。

学生時代の3年近くを過ごした橋場町に有った下宿の窓からは、卯辰山のホワイトハウスのネオンしか見えませんでした。今の舟田さんの家の近くで、清家さんや鈴木君の下宿も近くにあります。

した。その後住んだのは、暁町のすずらん荘。名前だけの学生向けのぼろアパートで、坂尻君の下宿からは真下に見える所に有りました。社会人になって金沢に戻ることになった時に選んだのは、奥名君の2部屋となり、間明町のアパートあけみ荘でした。

金沢に合計で8年間過ごした当時の生活の拠点はもう何年か前に無くなっている。橋場町の下宿は違う名前の新しい家に、すずらん荘は賢坂辻から角間に行く道路の下に、あけみ荘は立派な高層マンションに変わってしまいました。

その変わってしまったことについては感受性に乏しい私には何の感慨もない。その時、一緒に行動し同じ景色を見、同じものを食べ、同じように感じた(?)仲間がいて、いまだに同じ昔話で笑える…それだけで私は十分です。

でも、頼まれたお土産屋さんを探したところ、廃業して無くなっていたのにはがっかりでした。

追伸 宇野さん あの涙は良かった。

さて、この度も報告責任者の、舟田です。大学が角間へ移転してから、静かになっていく一方の金沢旧市街でしたが、昨年春の北陸新幹線開業から一変。その賑々しい金沢を見て頂く…になるかと思いきや、箱入りの金沢人でもよく知らない歴史を深く知ろうの散策になりました。しかも「美しい金沢の私 Part 2」が淑やかに、ぞろぞろと…。

今回特筆すべきは、比田井さん母娘にご参加頂いたことで、より昔を懐かしく語る二次会になり、忠篤さんも歌った歌として山唄を唱和したことです。「父が亡くなった歳に、もう私(妙佳さん)になりました」とのこと。そしてまた、墓地公園には、丁度金沢に転勤中のさおりちゃん夫妻の、4か月後のニューフェースを待つ幸せそうな姿がありました。受け継がれていく命に、神妙な感慨を覚えました。(よかったです。頑張ったね)。

たった4年間、されど4年間。この貴重なご縁を大切に、さらに励みに…再見!!



石川県青少年総合研修センター前にて 20名が勢ぞろい

主将あいさつ

60期 村居 龍樹

この度、金沢大学ワンダーフォーゲル部の部長を務めさせていただく60期の村居と申します。60年以上の歴史のある部活の部長に就任でき光栄です。私が山岳と関わり始めて2年ほどの身ではあるが故、このような大役を任せさせていただいて良いのかと思うこともありましたが、不撓不屈の精神で努めていく所存でございますのでよろしくお願いします。

はじめに、現在部は、4回生16人、3回生12人、2回生8人、1回生17人で活動をしています。今年の夏合宿は、北アルプスパーティーが3つと北海道パーティーで行いました。今年は個性豊かな多くの後輩に恵まれるとともに留学生の入部もあり、より一層活気のある部活となりました。

さて、現在53名で活動中の金沢大学ワンダーフォーゲル部ですが、多種多様なきっかけで入部をしたと思います。何例か挙げると、「山に登るのが好きだから。」「山独特の自然環境を楽しみたいから」「旅をするのが好きだから」「山で綺麗な写真を撮ってみたいから」などです。山行に出かけるたびに毎回思うのですが、山の楽しみ方は人それぞれであり、写真を撮ったり、植物観察したり、山を走って駆け抜けたり、はたまたテント泊をすることであったりと十人十色です。「山」という1つのフィールドでも様々な楽しみ方があると感じます。

ところで私がこの部活に入部して2年がたちますが、1回生の時に見た先輩の姿というのは非常に大きいものでした。先輩方は山の知識が豊富で、私が山の登りで苦戦していると、楽な足の運び方や、ルートの選び方を教えてくださったり、山に関する雑学や、植物の名前など私が今まで知らなかつたことを話してくださったりと先輩方から学ぶことが数えきれないほどありました。2年生の春から実際に先輩となりリーダーを務めることが多かったです。計画書の作成や、緊急時の対応など様々なことを考えなくてはならないことが多いことを知りました。また、山行中にも地図読みをしたり、天気図から天気を予測したりと知識と技術を必要とする場面があり、その時自分がまだまだ未熟であることを痛感しました。

3回生になると、夏合宿のリーダーを務めることになるのですが、それまでに不足している知力、技術、体力を身に付け、自分が抱いていた先輩像に近づけるように努めていきます。

最後に今年から雪上訓練に加え冬合宿が復活することになりました。また、来季からは活動範囲や、活動範囲を増やして部内での交流を増やしていくとともにOBの方々との交流の機会も増やしていきたいです。金沢大学ワンダーフォーゲル部の更なる躍進の年になるよう尽力していきます。

夏合宿 表銀座

60期 清水 大輔

“アルプスの銀座” そう呼ばれるに相応しい北アルプス人気ルート燕岳～槍ヶ岳の表銀座縦走に男10人が挑んだ。雨のために合羽を着るという至極当たり前のことを忘れさせるほどの晴天にも恵まれた。そんな男だけでの非常に濃い夏合宿を振り返る。

【1日目】

交通機関を利用して金沢～中房温泉での移動。比較的スムーズに移動することができ、計画通りに中房温泉に到着。メンバーの数名は温泉に入り、頂いたアボカドをマグロと和えた、おしゃれな料理を食べて星空のもと2日目からの登山に向けて就寝。したが、温泉が通っているため地面が非常に熱く寝苦しかった。

【2日目】



“北アルプス三大急登” の一つとして有名な合戦尾根を登り、中房温泉から燕岳までの行程をこなした。標高差約1300mの長い上りであったが、定期的にベンチがあり、合戦小屋ではスイカを販売

していたのでスイカを食べて、比較的良いペースで順調に上ることができた。燕山荘に到着し、噂通りの山荘のきれいさに感動するとともに目指す槍ヶ岳など北アルプスを一望でき、下界から山に来たことを感じさせてくれた。テントを張って、日本二百名山の燕岳にサブ行動で登頂。人気なだけあってテント場がほとんど埋まるほど多くの人がいましたが、翌日からの稜線歩きに備えて就寝。



燕岳より燕山荘

【3日目】

燕山荘～大天井岳～ヒュッテ西岳の縦走。鎖場など少し危険なところはあったものの人気のルートだけあって整備されていて歩きやすかった。大天井岳の頂上では晴れていて、槍ヶ岳に着々と近づいていると感じることができた。大天井岳から下った大天井ヒュッテは非常にハエが多く飛んでいて気分が悪くなつた。ヒュッテ西岳に到着後に西岳に登頂。テント場ではブロック現象、夜には澄み渡つた満天の星空を見ることができた。

【4日目】

この日の行程は、この夏合宿の中で最もタフで、最も大事で、しかも自分にとっては、4年越しのリベンジとなった一日だった。まずはヒュッテ西岳での朝日を背にしての出発。ハシゴが連続した水俣乗越までの下り、これがなかなかきつい。そして東鎌尾根を通って、槍ヶ岳を目指す。徐々に大きくなつてくる槍ヶ岳に圧倒されながら殺生ヒュッテに到着。そして槍ヶ岳アタック、個人的には4年前に高山病で登頂を断念していただけあって非常に楽しみだった。

頂上に立つた時は、何とも言えない達成感があり、360度見渡せる景色に感動した。この合宿で一番きつかったのがこの後の槍沢のテント場ま

での下りだった。最後はもう何も考えずに歩いていた気がする。

槍ヶ岳頂上

【5日目】

8/11(山の日)ということで山をやる人間としては、山にかかるべき日なのかもしれないこの日は上高地に下山して金沢まで帰つた。途中の徳沢ロッジではソフトクリームを食べた。これがおいしい。上高地に下ると、山の日というだけあって多くの人で賑わつていた。山の日で締めくくる夏合宿表銀座は無事終了。

この夏合宿は何にも代えられない経験になつたのではないだろうか。夏合宿を通して自分は成長できたのだろうか。なぜ山に行くのか、それは山に行き下界を忘れて過ごすことで人として何かを得て成長できるからだと思う。長く山を続けていきたいと思うし、まずはワングルとしてのあと一年を充実したものにしていきたい。

夏合宿を終えて

61期 天木 智晴

私の地元は埋め立て地の工業地帯にあつたため、純粋な自然と呼べるものは海くらいしかありませんでした。そのため説明会で山の数々の自然や風景の写真を見せていただいた時、その美しさに魅了されてしまいワンダーフォーゲル部に入つてしましました。

登山に対するイメージと実際に山に登るということの違いに、大きな衝撃を受けたのは新歓で登つた医王山です。「学校の裏山」と聞いていたのでハイキングのようなイメージを持っていましたが、甘かったです。ぬかるんだ道と生い茂る植物、続く登りは、ただでさえ少ない私の体力を奪つていきました。特に、白元山の手前は陥しく、本当に辛かった記憶があります。しかし、登つた先で一面に広がる田んぼの景色を見下ろした時、疲れを忘れるほどの達成感と感動を覚えました。

夏合宿では、さらに色々なものを見ることが出来ました。初日の薬師峠にあるテント場では、空一面に広がる星や星雲がまぶしいほどに輝いていました。どんなプラネタリウムよりも美しく、

この一年間で見た山の景色の中で最も感動した、忘れられない風景です。

三俣山荘へ行く途中の道では、台風の通過した直後であったことが思ひぬ形で幸運をもたらしてくれました。雷鳥を見ることが出来たのです。臆病だと聞いていましたが、あまり人に関心を示さず、熱心にえさを食べていた様子はとても可愛かったです。

最終日の双六小屋では星と朝焼けが、同時に空を彩っていました。その後歩いてゆくうちに凄まじい勢いで表情を変えていった空は、まるで映画のようでした。途中には、朝日に照らされながら聳え立つ槍ヶ岳も見えました。どれも言葉では言い表せないほどの絶景です。槍ヶ岳にもいつか登ってみたいになりました。

夏合宿で見た景色はどれも本当に美しく、きつかったことや辛かったことを一瞬で忘れさせてくれました。おそらく今後もこういった景色に絆され、どんなにきつても登山を続けてしまうのだと思います。

景色のほかにもう一つ、夏合宿すごいことがあります。それは先輩方の体力や知識、判断力です。

登っている途中、先輩方はこれから歩く道がどのような勾配なのか、どのくらいの時間で次のポイントまでたどり着けそうなのか、安定する足場の選び方、といった具体的なことを教えてくださいながら励ましてくださったのです。これは精神的にとても楽になりました。重たい荷物を持っているにも拘らず、下級生を常に気遣うことの出来る余裕があるのは本当にすごいと思います。

台風が来た時には、一年生の書いた天気図から天気をかなり正確に予測し、すぐに行程を変更していました。実は、更に私が怪我をしたことで全ての行程をこなすことが出来なくなってしまったのですが、そのときも先輩方は迅速な判断を行い、行程やルートを変更してくださいました。先輩方の持つ山の技術や知識には圧巻されると同時に、自分の知識不足や技術不足を痛感し、私ももっと勉強をしなければならないと感じました。

私のせいで行程を変えてしまったことは、今でも悔しく、メンバーの方々には本当に申し訳ないと思っているのですが、夏合宿は新鮮なことばかりで楽しかったです。そう思えるのは、励まし、

助けてくださったメンバーのおかげだと思います。とても感謝しています。この悔しさと感動したことをバネに、来年は私自身が先輩方のように下級生を引っ張っていけるよう努力したいです。そしてあと三年間で、もっといろいろな山に登ってゆきたいです。



双六小屋キャンプ場

北アルプス夏合宿

60期 梅北 浩志諒

2016年8月9日から8月14日にかけ、自分たちは槍ヶ岳を登りました。2回生になってから入部した自分にとって、今回の夏合宿は新鮮なことばかりでした。登山初心者の自分でしたが、パーティの皆さんとの心強い支えもあり無事に山行を達成できました。全六日間にわたる山行を心に残ったことを交えながら振り返りたいと思います。

1日目 折立～薬師峰

朝5時過ぎ。金沢駅に集合した自分たちは合宿スタートの地、折立を目指し電車とバスを利用して移動しました。人生で初めて北アルプスを（というより山を）数日かけて登ることに自分はワクワクする気持ちの半面、そこはかとない不安感を抱いていました。その気持ちは、登山開始してからも晴れることはなく、そんな気持ちを表しているのか、小雨の降るどんよりとした天気でした。途中の景色を楽しむ余裕もなく、上り坂のつらさに加え、レインウェアを着ることによる湿気と暑さが体力を奪っていました。五光岩ベンチ、太郎平小屋を抜け、薬師峰のテント場に着いても天気は回復せず、食事は各テントでそれぞれに。お楽しみの飲み会の時間もなく、まさにこのとき、自分の心の疲れのピークであったように感じます。

2日目 薬師峠～雲ノ平キャンプ場

前日までの天気が回復しレインウェアはザックへ。一晩たち慣れたのか、心も軽やかになり余裕が出てきました。出立前にトイレに行くと、今までに見たどのキャンプ場よりもトイレがきれいでした。張り紙には、北アルプスで一番清潔を目指していると書いてあり、身もこころもスッキリとしました。この日の行程は太郎平小屋へ戻り、左俣出合、薬師沢出合、アラスカ庭園を抜け雲ノ平キャンプ場へ。薬師沢小屋までは難所はなく順調でしたが、その先のアラスカ庭園へ至るまでの岩場がこの山行で最もきつい場所でした。長く、険しく、急勾配な斜面は圧倒的存在感でした。しかしそこを抜けると見晴らしの良い開けた地形が現れ、遠くにひときわ高くそびえる槍がなんだか神秘的に映りました。槍が視界に入ってから、完全に気持ちが切り替わり、槍を制覇することしかありませんでした。のち無事に雲ノ平山荘、キャンプ場にたどり着きました。山荘の食堂で先輩が台湾飯（？）を注文するのを見て自分も注文すると、「もう売り切れです」と言われ食べられなかつたのはいい思い出です。

3日目 雲ノ平キャンプ場～三俣山荘

この日が最も濃密な行動でした。当初予定では、祖父岳、水晶岳を登り、岩苔乗越へ戻り、黒部源流を通り三俣山荘へむかう予定でしたが、乗越からそのまま鷲羽岳へアタックしました。水晶岳、鷲羽岳ともに2900m超の険しい山でしたが、鷲羽山頂へ達したときは、達成感から気分が高揚しました。すがすがしい気分で三俣キャンプ場へ下りましたが、違和感に気づきました。紫外線対策を

怠っていたため、日焼けで自分の耳が腫れていました。鏡で見ると指で引っ張っているかのように、耳の存在感が顕著でした。紫外線対策の重要性を身に染みて感じました。

4日目 三俣山荘～双六小屋

この日、前日に鷲羽岳にすでに登っていたため全行程の中で最も緩くお昼前には着きました。三俣蓮華岳を登るとき先頭を務めましたが、細い道でのすれ違いが多く苦労しました。双六小屋までの道程で初めて雷鳥を見ました。普段お目にかかるないだけにとても新鮮でした。到着後は皆、ここまで疲弊がでたのか、テントを張り早々に休憩しました。今回は双六岳には登らなかったので、今度機会があれば登りたいです。

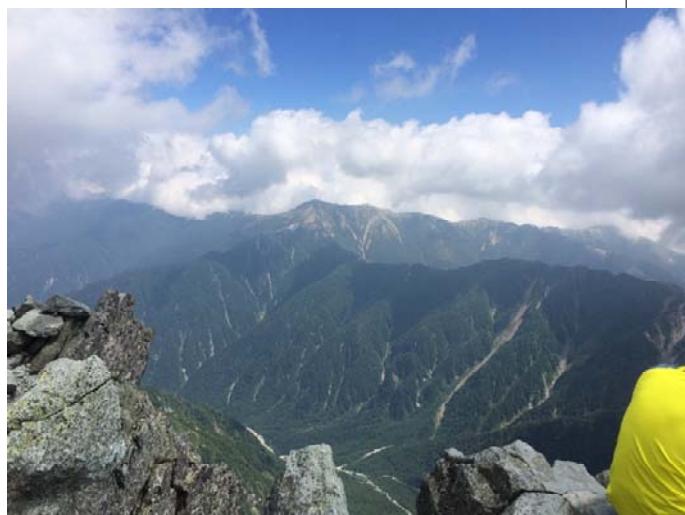
5日目 双六小屋～槍ヶ岳山荘

ついに槍ヶ岳を登る日でした。朝5時くらいに出立し、硫黄乗越を通り、西鎌尾根を辿って目的の槍へ。途中鎖場や険しい岩場があり、危険だなと思う場面や、山荘直前の急勾配が二日目の岩場に次ぐキツさでしたが、今まで遠くにそびえていた槍が近づくにつれ、ここまで来たという気持ちが強くなっていました。ついに山荘に到着し、テントを張りしばらく休憩をし、ついに槍山頂へ。サブザックに切り替え、滑落の恐怖におびえつはしごをのぼり、ついに無事に標高3000m超の景色を拝むことができました。合宿前のもやもやとした気持ちは微塵もなく、ただ達成感に浸っていました。登頂に満足した自分が下りの方へ大変なことに気づき気合を入れなおし、下山しました。



写真：長い岩場の先の開けた地にて

写真：槍の頂上を目指す人々の図



6日目 槍ヶ岳山荘～新穂高温泉

最終日、飛騨乗越方面から下山、急な斜面は序盤だけで、おおむね緩やかな下り坂をただひたすらに下りました。下山しながら山行を振りかえり、初日以外、まさに山行日和な気候であったことを思い返し、恵まれた山行であったと思っていました。温泉で久しぶりの風呂を堪能し、重い体を引きずりながら、無事金沢駅に到着しました。

いろんなことを感じた合宿でしたが、パーティーのメンバーがいてこそ達成できたことだと思います。皆に助けられながらの山行でしたが、次は皆をリードできるように頑張りたいと思いました。

夏合宿 北海道

61期 内田 大智

ワンダーフォーゲル部に入って初めての合宿では、北海道の雄大な山々を縦走することができました。台風が接近していたため天候には恵まれませんでしたが、いろいろと思い出深い山行となりました。

【1～3日目】

1～3日目は移動日でした。高速バスで新潟まで行き、新潟港から出ているフェリーに乗って小樽港に着きました。そこからトムラウシ温泉まで電車とバスを使って移動しました。新潟市内を観光したり、フェリーの中で映画を見たり、カモメにかっぱえびせんをあげたりと、移動中も楽しく過ごすことができました。札幌駅や北海道大学にも行くことができました。



【4日目】

4日目から山に登り始めました。この日は僕のおなかの調子が悪く、先輩からいただいた正露丸がなければと考えるとゾッとなります。腹痛が治まると土砂降りになりました。この日は登り中心のきつい行程ということもあり、雨による寒さも相まって、かなり苦しい山行でした。なんとか無事にトムラウシ分岐にたどり着くことができ、テントの中で飲んだ暖かいココアは至福でした。しかし、あまりにも天候が悪いため5日目は下山する案がでました。残念でしたが、悪天候の山行は危険も伴うので仕方ないかと思って就寝しました。

【5日目】

この日は昨日の天気がうそのように晴れました。そのため下山することは止め、トムラウシ山に登頂することができました。頂上からは周りの山々を一望することができ、合宿中で1番最高の景色を楽しむことができました。その後、天候は崩れてしまましたが化雲岳をカットして、五色岳を通り、忠別岳避難小屋にて一泊しました。避難小屋ではほかの登山者の方から荷物になるということでお米を分けていただきました。いつも食べ足りていなかったのでとても嬉しかったです。

【6日目】

6日目は忠別岳避難小屋から忠別岳、白雲岳を通って、白雲岳避難小屋にて一泊しました。この日も天候は回復せず、頂上もガスに覆い尽くされており、景色を楽しめませんでした。登山3日目ということもあり疲労もたまり、景色も見えないということで体力的にも精神的にもつらい山行が続きました。そんな中、弱音を吐きながらも歩

き続け、時折楽しい話をしてくれるパーティーメンバーに支えられました。特に僕の前を歩いていた先輩は体力が尽きかけているのに、気力と根性だけで登っていました。その姿を見て、まだ体力が残っている自分があきらめてはいけないと、勇気をもらいました。

【7日目】

7日目は白雲岳避難小屋から旭岳に登り、ロープウェイを使って下山しました。この日は天候が少し回復し、ガスってはいるけど雨は降りませんでした。また一時的にガスが晴れ、景色を楽しむことができました。旭岳の頂上ではガスがとても濃かったですが、ほんの一瞬シャッターチャンスが訪れてくれたので良かったと思います。僕はそのチャンスを逃してしまったので悔しかったです。また、たくさんの外国人の方や小学生ぐらいの子がいました。旭岳の人気を改めて実感することができました。

【8~11日目】

8~11日目は観光&移動日でした。旭川動物園や小樽を観光することができました。観光中はいろいろなことがありました。どれをとってもいい思い出になりました。最後には回転寿司で北海道の海の幸を堪能することができました。

初めての北海道で初めての縦走ができとてもいい経験になりました。合宿中は先輩に助けられてばかりだったので、2年生になって後輩が入ってきたときは合宿の経験と北海道の楽しさを伝えられればいいかなと思っています。

〔 冬の北八ヶ岳 〕

走友会仲間で山のベテランに冬山登山を誘われた。久しぶりなので装備が心配だったが、部屋の中でゴロゴロしているよりも体に良いかなということで同行することにした。

1月10日にエントリーしていたハーフマラソンは取りやめとし、9日の早朝に新宿から茅野を経由して、登山口の渋の湯にバスで11時半に到着した。雪は想定していたよりも少なく、アイゼンを装着して12時に登山開始。林間の道はラッセルするほどの積雪ではなく、部分的に表面が凍っている状況で楽に進んだ。途中の賽の河原の大きな転石のエリアでは苦労したが、高見石で景色を眺めて青苔荘に予定通りに到着。この小屋の名前のようにこの地帯は有名な苔の繁茂地。小屋の主と枯れ木で繁殖する地衣類は、生木に付着して木を枯らすのか、枯れ木に付着して成長するのか議論は平行線で終わった。

夕食の熱燗と食事は良かった。小屋泊まりの登山は客が少なくて、同行者の鼾さえなければ快適なのだが。朝方の外界はマイナス10℃でさすが冬でしたが、観光地の小屋だけあってトイレは暖房完備のウォッシュレットでした。

7時半に小屋を出て目的地の縞枯山に向けて縦走路を歩きだした。雪は相変わらず少なく、登山者が多いので踏み固められて歩きやすい。行合う登山者の足元を見ると立派なアイゼンを着装していて、当方の古い貧弱な8本爪では恥ずかしくなる。氷壁の谷を詰めるなら必要かもしれないが、こんな縦走路では歩き難いはずと、自分なりに無理に得心して歩を進めた。途中の麦草峠では冬季は閉鎖されているが、夏は国道299号線が横断するところ。この国道には峠ではバス停もありメルヘン街道とかで、立派なヒュッテが建っていた。当然のこと手袋をして両手でストックを使つたが、新たに購入した手袋の保温性が低く大失敗でした。仕方なく下界で使っている物に替えてなんとか切り抜けた。天候は良好で強い風雪がなく手袋以外では装備面ではボロが出なくて幸いであった。茶臼山を通過して名前の通りの縞枯れ状態の頂上で記念写真を撮って、北八ヶ岳スキー場

のロープウェイの頂上駅に下山した。ここは全くの別世界で家族連れの人達で賑わっていた。子供たちにも立派な装備を揃える今の親たち大変なことだと、貧乏暮らしある余計な心配をした。

帰途は奥蓼科温泉郷で温泉に入り、熱燗とソバを堪能した。この周辺は別荘地で多くの立派なハウスがあるが、メンテナンスが大変だろうなどまた余計な心配。久しぶりの雪山でしたが、北陸の雪と異なってパウダースノーであり、積雪も少なく楽な登山で終わりました。



〔 夏の南ア・荒川岳 〕

例年の白山・南龍の合宿に参加して体のトレーニングをして、南アで登り残していた荒川岳に登る計画をたてた。毎年のことだが梅雨明けの安定した天気にいつなるか、これと椹島へのバス予約のタイミングが問題。白山から帰宅後に8月5日で幸いにも予約がとれた。そのときに悪天ならば中止することで山行の準備をした。

5日からは天候は安定しそうだが、赤道近くで台風が発生したので多少気がかりではあった。とにかく今年は台風が多い。例によって東海フォレストのルールで椹島ロッジに泊まらないと、送迎バスを利用できないのでテント持参ながら一泊する。

6日は二軒小屋に行く林道から離れて吊り橋を渡り急坂を登り始める。別名が示すように本当に悪沢で、荒れた状況ではないが本当に悪路だ。最初の2時間はテント泊の荷物が多いので苦労した。ようやく尾根筋に出たので林間でもあって、日陰でなだらかな路になった。千枚小屋までの中間で水場でもある清水平に、地図上のタイム4時間から2時間遅れで到着。この辺りでカメラを忘れてきたことに気が付く。以前にはコツヘルを忘れたこともあった、老化現象だ。さてどうやって

登頂したことを証明するか問題だ。

水場で給食してしばらく登ると、窪地があつて木馬道というところがあった。本当にこの辺まで登って材木の切り出しをやつたのか？周辺には古い切り株があるので、明治・大正時代の人達のエネルギーには驚く。基地であった椹島よりも千メートルも高いところだ。テント場の千枚小屋まではシラビソの原生林が続き、小屋の周辺は鹿が食べないトリカブトやキャラブキが多い。午後3時半にテント場に到着したが、想定時間よりも3時間の遅刻だ。

テント設営が終わる間もなくスコールがきた。気が付いたらサイドポケットに入れておいた、ウィスキー入りのペットボトルを途中で落としていた。大ショック。食事は自家製のキュウリとパスタ類にスープとウィスキーのお湯割りで至福の一時でした。夜間は風の音がしたが、夜空は満天の星でテントから覗く気分は最高であった。

翌日も晴れで6時にテントを撤収して、荒川岳に向かう。千枚岳に登る途中でザックを置き、サブザックで身軽になる。千枚岳と丸山の途中にお花畠があり、マツムシ草とミヤマナデシコと白地に薄紫の筋が入ったラッパ咲のタカネビラン？の群生が見事であった。然しながら相変わらず悪沢的なガレ場と岩場のやせ尾根が続き、荷物はサブザックながら苦労する。とても今の自分には縦走用の重いザックでの走破は無理だと得心した。

正式には荒川東岳（悪沢岳）というが、この辺では赤石岳よりも20mほど高く南アの南部では最も高い山。頂上からの眺めはよかつたが、近くの塩見岳が方角のせい以外と小さく見えた。問題の記念写真だが、恥を忍んで居合わせた中年のご夫婦に頼み、後日メールで送信して貰った。お礼に持参のキュウリを差し上げたところ、喜んで食べてくれた。

さて頂上から二軒小屋までの急坂の下りはどうなるか？最初はなだらかな尾根筋の下りで楽勝であったが、案の定最後の大井川源流への下りで大苦戦。急坂のガレ場の連續で、前向きでは頭から転落の危険があり、後ろ向きの四つん這いで下ることになった。さすがに荒川岳であつて、川の近くでは悪路の状況が半端ではないと感心した。苦労して下る途中で、ウルトラマラソン仲間である女性と偶然にも出合った。赤石岳に縦走す

るとかで、しばし立ち話をする、大きな荷物を担いでおり若さにはかなわない。ようやく川原にたどり着きテント場では午後6時になっていた。休憩を入れて朝から12時間要したことになり、これなら荷物が無いだけでもウルトラマラソンの方が楽だと思った。

テント設営の後に日暮れ間近になってしまったが、しばしあ湯割りを飲みながら行程を反すうした。結局のところ難しいと思った通りにこの山は大変だった。単に頂上を目指すなら三伏～赤石岳の縦走路から分岐して、空荷で往復するのが良さそうだと思う。これで南アの登山も打ち止めにするか？

翌日の8日も晴れで、今日は椹島まで4時間も林道を歩けば終わり。ここは蝙蝠岳の登山口と、伝付峠から身延町へ出る拠点となるところだ。でも今は峠越えで身延に下る人はいるのかな？

椹島ではバスの時刻までは時間が余り、何時ものように大井川で沐浴をして汗をながした。その後装備を天日干ししながらラーメンを食べていたら、救急ヘリが来るから荷物を片付けてくれとの指示がでた。何事かと思ったら怪我人を搬送すること。怪我人の様子を見たら、登山中に転倒して顔面打撲で意識があるものの、歩けない模様であった。昨日俺もやっていたかもしれない、危ないところでした。



荒川東岳の頂上にて



山頂より右が中岳・左が赤石岳

立山砂防トロッコ PW

11期 加藤 忠好

国土交通省立山砂防工事専用軌道、略称立山砂防トロッコ。実は以前に乗ったことがある。立山砂防博物館の一般募集によってである。応募してくれたのは同期の小山さん。何回も葉書応募してくれ、やっと10月中旬の部に当選し出かけた。晴れの日だった。



〈クズノ谷鉄橋にさしかかるトロッコ〉

立山カルデラの中は秘境中の秘境。そこに向かう狭軌トロッコの恐さは、黒部峡谷鉄道を超えている。今時こんな軌道が現役で生きていること、それ自体が驚きである。しかも、スイッチバックで斜面を駆け上る。場所によっては約200mの高さをジグザグで丁寧に登っていく。世界的にもこれは珍しい風景であろう。狭軌だから出来る技が随所に現れ、それだけにスリル満点なのだ。

それなのに、前回はろくに下調べもせずに出かけたことが心に引っかかっていた。

今回、長岡さんから「応募の最終週に団体予約するつもりだけど、どうだろう」との相談を受けたとき、諸手をあげて賛成した。

実施日10月20日、それ以降はないのだから紅葉見物に最適日の当選だった。



〈トロッコと記念撮影〉

最初のメールによる案内文書に気づかない人が多かったようだ。

それでも、このPWの良さを嗅ぎ分ける人が居たのも確かだ。何を嗅ぎ分けたのか。それは抽選

なしで紅葉見物ができる時期に確実に参加できるという貴重な香りだった。

企画者の彼を通じて、団体で予約する際の問題点がわかつてきた。企画は富山県の砂防博物館であるが、実施に不可欠なトロッコ運行管理は国の砂防事務所。しかも、一般人の安全にまで気を配らなければならないので、砂防事務所はこの企画に消極的。実施前日の天気予報の降雨率が50%以上のときはトロッコの運行は中止。統計的に見てトロッコ運行中止率は約5割との由。一方、一般立入り禁止となっているカルデラ内の移動は、小型バスで行うが、利用団体がバスを準備しなければならない。トロッコは片道だけというのも、そのことを補強している。利用者にとって融通が利くマイクロバスやタクシーなどでの移動は不可。博物館は、トロッコ運行中止でもバスのキャンセル料については一切関与しない。バスを準備するのに、企画内容は型どおり以外ほぼ不可。さすがにお役所は強気、かつ責任回避には精力的。そのうまさに拍手を送らざるを得ない。しかし、トロッコ乗車は無料なのだから文句はいえない。



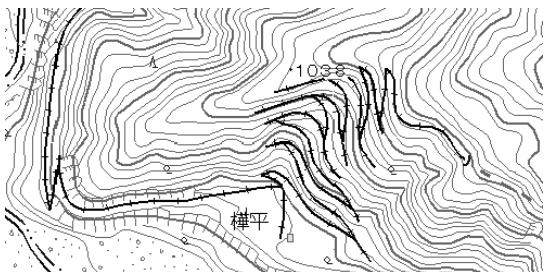
〈砂防博物館にてKUWVOB参加者〉

PWには佐藤④、山村⑧、野村⑧、長岡⑪、井上⑪、森川⑪、片田⑪、加藤夫婦⑪、野村⑫、金井⑯、間所夫妻⑯の13名が参加した。トロッコの座席は3両で9シート。前回の経験から、ガイドが2名乗り込むとして16名ぐらいがちょうどと思っていたが、通常、博物館での一般募集定員は20名。それに参加人数が多くなれば参加費用が安上がりになるとの配慮からか、長岡さんが知人に声掛けして最終18名となった。

自己都合による参加辞退もあるだろう。トロッコ運行中止に伴う実施中止もあるだろう。そのときになって慌てないよう、参加費負担のルールを事前作成し、参加者に了承してもらった。諸連絡についてはメールとHPの2段構えで洩れがないようにした。

備えあれば憂いなしの諺どおり、辞退者もなく、

天気の心配もなく、定刻の9時前には18名全員立山砂防博物館前に集合した。



トロッコ乗車までの約1時間、博物館見学がついている。入館料無料の上、ボランティア解説員が2名による説明があった。私の最大の関心事であつたトロッコについては、ここでは特段の解説がなかつた。どうやら、博物館も砂防事務所もトロッコの方は2次的、砂防のPRを主目的にこの企画を組んでいたらしかつた。当然といえば当然である。



〈弥陀ヶ原側の崖にかかる水谷の滝〉

いよいよトロッコへの乗り込みである。私は前回の経験から、最前列に並び、目的の座席を目指した。今回こそ……いい写真が撮れるぞと思ったら、すぐ後に看護役の若い職員が乗っていた。車両からカメラを出すのは危険につき、ご法度なのだ。結果的には前方を睨む彼のその真面目な態度を称えることになった。その分、写真の撮影枚数が少なくなってしまったのはいうまでもない。その上、元建設省職員だった長岡さんに関連していたかどうかは不知であるが、今回、特別に砂防事務所の副所長まで乗っていた。

軌道沿いの瀟洒な建物は連絡所（駅）である。オバサンと呼ばれる女性が勤務しているので手を振ってくださいとのことだったが、オバサンといえないほど若い人もいる。迷わず手を振ることができた。

スイッチバックとともにトロッコは高度を稼

ぐ。すぐさま川底がまたその高度まで追いついてくる。真川と湯川の合流点付近では圧巻14段のスイッチバックに入った。対岸に聳える鉢崎山がぐんぐんと高度を低くしていくのがわかつた。と同時に、木々が色づいてきた。後続する作業用のトロッコも下の段の軌道を走行しているのが見えた。

スイッチバックを上りきり、最後の折り返しで標高約1100m、トンネルを過ぎたところで停車した。狭いトロッコの外に出ると正面に水谷の滝が見えた。

ここから終着駅はすぐであるが、この夏の水害で水谷の鉄橋が曲がってしまったらしい。橋の手前で下車。事務所まで歩いた。上を見るともう一本の滝が見えた。名もない滝という。前回事務所から見えた滝がこれだった。秘境の二本の滝。これをカメラに収める幸運。曲がった鉄橋に感謝すべきか…。

以降は、前回とほぼ同じ見学を同じように駆け足で回った。重要文化財でもある白岩堰堤、カルデラ内の展望所、旧立山温泉、泥鰌池などを回った。移動はもちろんバスである。前回と違うのは、天涯の湯の足湯も白岩堰堤全体が見渡せる展望地はカットされたが、靴が泥んこになったとしても、貴重な跡津川断層の露頭の見学が加わったのだ。

カルデラ内では、鷲岳も鳶山もガスに覆われていたが、ダケカンバの幹の白さと染めの紅葉が心地良かつた。やはり秋はいい。しかし、碧空の下に白き峰があり、その下に紅葉と岩がある三段紅葉の風景。それは次回の幸運に委ねよう。それと天涯の湯もだ。

有峰湖畔まで来ると、紅葉の上部に長く横たわる薬師岳があつた。



〈旧立山温泉跡地に立つ慰靈塔〉

香港～Manhattan with Alps～

17期 小島 敬

香港と聞いて浮かぶイメージは、ビクトリア・ピークからの「百万ドルの夜景」だろう。ビクトリア・ハーバー沿いに摩天楼が林立する。ニューヨークのマンハッタンを抜き、超高層ビルが世界で最も集積している地域だ。700万を超える人々も都市部に集中して住んでいる。高層アパートの一室に三世代が同居するのは珍しくない。年寄りと暮らしているせいか若者たちは老頭児（ロートル）にやさしく、地下鉄に老人が乗ってくると若者は弾けるように席を立つ。

香港を”Manhattan with Alps”と紹介したのは、香港の行政副長官だったアンソン・チャン女史だ。この言葉は決して大げさではない。喧騒と猥雑に満ちた香港の街を少し離れると、そこには驚くほど豊かな自然がある。九龍半島やランタオ島には900m前後の山がいくつも聳えている。英國統治時代の第25代総督M・マクリホース（在任期間：1971年～82年）は大変な山好きで、この総督が香港の自然公園制度を始めたお陰で香港全土の4割が公園等に指定され、1980年代の高度成長期の乱開発から守られた。香港の山々は樹木が少なく草地帯が多いので、日本の山岳地帯のような快適な稜線漫歩が楽しめる。まさにManhattan with Alpsなのだ。これらの山々をつなぐ4大トレイルが、MacLehose Trail（全長100km）、Wilson Trail（78km）、Lantau Trail（70km）、Hong Kong Trail（50km）だ。各トレイルは良く整備されていて、500mごとに標距柱（Distance Post）があり、その番号で現在地が確認できるので便利だ。地図（2万5000分の1）も精密でカラフルだ。気候が温暖で一年を通して山歩きが楽しめる。香港人の平均寿命は男女とも世界一（日本・厚生労働省「簡易生命表」2016年7月公表）だが、香港の山で会うのは若者ばかりなので、薬膳料理と太極拳が長寿の秘訣なのかもしれない。

【マクリホース・トレイルを堪能する】

マクリホース総督の名を冠したMacLehose Trailは、九龍半島の自然公園を東西に横切る香港を代表する長大なトレイルだ。半島東部の海食崖と草地のコントラストの美しい海岸を出発し、最初の難関①馬鞍山〔Ma O Shan:702m〕を登り、渡る風

のさわやかな高原を歩き、ホシクサの群生する湿地帯を横に見て、野猿の出没する鬱蒼とした森を抜け、直登するしかない針山〔Needle Hill:532m〕を直登し、全山ススキに覆われる香港最高峰の大帽山〔Tai Mo Shan:957m〕を越え、山の中の広大な貯水池のほとりを延々と歩き、食虫植物ウツボカズラの自生地を間近に見てようやくゴールに辿り着く。



①馬鞍山(Ma O Shan)

香港で一番爽やかな季節の11月に、”Trail Walker(毅行者)”というチャリティ・ウォークがこのトレイルで行われる。近年では1000を超えるチームが出場する一大イベントになっている。4人一組（リレー形式ではなく4人揃って）で、MacLehose Trailの第1から第10ステージに至る各チェックポイントを通過し制限時間の48時間以内にゴールする『体力と気力とチームワーク』を競うレースだ。元々は香港駐留のグルカ兵の耐久訓練（4人というのは軍隊の最小単位）として始められたが、返還後の1997年からは市民団体Oxfamが運営している。13～14時間でゴールするトップチームは超軽装でひたすら走り抜けるが、アップダウンの激しい標高差1000m近い山岳コースを一睡もせずに歩くのは、一般的の参加者には過酷だ。気温の日較差（昼30℃～夜10℃）も大きい。100kmという長丁場なので、チームとして制限時間内にゴールへ辿り着けるのは8割に満たない。

ない。体力面でのトラブルや怪我、レース中の内輪もめによるチーム分裂等、100kmには様々な困難が待っている。しかもチームで規定の寄付をしないと参加できない。苦労を売りたい年齢になって、わざわざ苦労を買うわけだ。それでも Trail Walker は大変な人気で、出場権を獲得することから競争が始まる。

香港で暮らすこととなり香港関係の本を物色していて、庄司雅昭『香港低山散歩』(山と渓谷社)を見つけた。香港は自然豊かで多くの山の会が活躍していることを知り、救われた気がした。香港には屋台と高層ビルしかないと思っていたのだ。着任後、Trail Walker(毅行者)に毎年参加している活発な会に入会した。「歩き回るのは夜の街だけ」という怠惰な生活から足を洗うため、会から出場する四チームの一員に加えてもらった。多国籍チームや男女混合チームなど構成メンバーは多彩だ。ぼくのチームは Trail Walker 経験者ゼロの日本人オッサンチームだった。でも、自主トレも夜のミーティング(飲み会)も熱心に行なう、一番まとまりのあるチームだった。山岳部OBもいたが加齢による体力の衰えと日頃の不摂生で往年のパワーは見る影もない。花の中高年は健康と体力を金で買うしかないのだ。体温低下を防ぐハイテク Tシャツ、足のよく上がる五分脚スパッツ、飲めば疲れが吹き飛ぶスポーツ飲料などなど、本番に備えぼくらは香港や日本で秘密兵器を買いそろえた。軽登山靴も新調した。「体力では若者に劣っても熟年の知恵が完歩をもたらすのだ」と中年4人組はほくそえむのだった。

9月から山の会での練習が始まった。マクリホース・トレイルのコースを毎週 20km(2ステージ)ずつ歩くのだが、平地ではなく山間コースなので、早足でも 6~7 時間かかる。始めのころは体がついていかず、日曜のトレーニングの疲れがようやく金曜に取れるという情けない状態が続いた。しかし本番に向けるメンバーと徐々にテンションを高めていく一体感はとても心地いいものだった。初めて接する香港の多様な自然にも感動した。練習が終わって場末の中華料理店で飲むビールのおいしさは格別だった。自主トレも含めマクリホース・トレイルは2ヶ月で 180km 歩いた。ヘッドランプをつけての夜間練習も行なった。稜線を舞うホタルが幻想的で美しかった。

【Trail Walker(毅行者)奮闘記】

11月、いよいよ Trail Walker 本番の日がやってきた。抜けるような青空、風も爽やかだ。中年4人組は盤石の自信をもって臨んだ。目標時間は30時間、気合は十分。山の会では15名のサポート隊を結成し、コース途中2ヶ所の私設サポート地点で、会から出場する四チームを支援(飲み物や食事、マッサージの提供)してくれる。チェックポイント毎に Oxfam のスタッフが選手のリストバンドのバーコードを読み取るので、サポート隊もネットで出場四チームの通過状況が逐次把握できる。Trail Walker には毎年ドラマが生まれると先輩たちから聞いていた。今回はどんなドラマが待っているのか、初参加のぼくたちは期待と不安を抱きつつ、やや緊張した面持ちでスタートラインに並んだ。号砲が鳴り 100km 先のゴールを目指し一斉に飛び出した。

第1サポート地点(第6ステージ始点)迄は極めて順調。サポート隊の皆さんの声援に余裕で応え、出発した。歩き始めてしばらくして、あれ?おかしい。まともに歩けない。痛みがどんどんひどくなる。Trail Walker では何が起こるかわからないとは聞いていたが、●×▲■はまったくの想定外だ。しかしこの表現不能な痛みは激しさを増すばかりでいかんともしがたく、這うようにしか歩けない。解決の手立てがないまま、絶望的な遅い歩みで、炎天下の針山、草山、大帽山 [957m] を越えていった。足の故障という「山屋らしいまつとうな理由」ならいざしらず、こんなことが原因でチームメイトに後れを取り大変な迷惑をかけていることが返す返すも悔しくて、身を切られるほどつらかった。「リタイアしたらすごく楽になるぞ」という悪魔のささやきが何度も聞こえる。でも今歩くのを止めたらきっと一生後悔する。メンバーが一人でも欠ければチームの公式記録として残らないのだ。しかしこのスピードでは、ゴールタイムはゆうに 40 時間を超えるだろう。自分の為にメンバーに迷惑をかけていいのか。どうしたらこの苦境から抜け出せるのか、夕暮れ時の大帽山から第2サポート地点までの長いスロープをガニ股で歩き続けながら考えた。しかし、チームメイトの見事な機転で、あっけなくこの問題が解決した。地獄に仏とはのことだ。

第2サポート地点(第8ステージ終点)での仲

間の歓待は、涙が出るほどうれしかった。よくぞ、他の三チームより3時間も遅れてきたぼくたちを辛抱強く待っていてくれたと思う。中央で仁王立ちのリーダーK氏からサポート隊メンバーに指示が飛ぶ。マッサージ師のSさんたちによる本格的なマッサージ。初めて登山靴を脱いで横になった。痛いけど我慢してマッサージを受けている内に疲れが取れていく。癒された後はすぐ夕食。のっぺい汁が体を温めてくれる。隣に座ってなんやかやと元気づけてくれるM女史。食事の間、懐中電灯で手元を照らし続けてくれたI嬢。パワーがすっかり蘇り「今日中にゴールする!」などと理由もなく口走ってしまう。

サポート隊の暖かい励ましを背に、ぼくらのチームは深くて暗い夜の森へ踏み込んでいった。あれほどの選手たちがどこへ消えたのかと思わせるほど人気もなく深閑としている。闇の底をチームが進む。第9ステージを終え、ようやく最終ステージへ。疲労がピークに達し眠気がどつと押し寄せてくる。気が遠くなるほど長い平坦なコンクリート道を歩く。時計を見る。日付が変わろうとしていた。33時間19分でゴールイン。何よりも4人揃って踏破できたことが嬉しかった。選手とサポート隊が心を一つにしてゴールを目指すTrail Walkerに参加し、仲間の素晴らしいしさを改めて教えられた。

【香港のお勧め】

自然を求めて会のメンバーたちと山や離島へ出かけた。お気に入りの場所を紹介しよう。マクリホース・トレイルの第2ステージから少し外れた②シャープピーク [468m] は香港で最も人気のある山だ。標高こそ低いが、半島の基部に槍ヶ岳のように屹立した美しい山容は多くの登山者を魅了している。狭い稜線を行くルートはスリリングでアルペン気分が味わえる。ランタオ島にある香港第二の高峰ランタオピーク [鳳凰山: 934m] はどっしりとした山で登りがいがある。サンセントピーク [大東山: 869m] と結ばばランタオ・トレールのゴールデンコースとなる。

山以外では、中国国境にある米埔自然保護区 [Mai Po Nature Reserve] がイチ押しだ。1995年にラムサール条約に批准された。マングローブ林や湿地が広がり、340種以上の野鳥が確認されている。日本野鳥の会・会員に案内いただいた時

は、貴重種クロツラヘラサギ (Black-faced spoonbill) など多くの野鳥を見ることができた。



②シャープピーク (左) と大浪湾の浜
離島では香港最南端の蒲台島 [Po Toi Island] や、饅頭祭で有名な長州島 [Cheung Chau Island] がお勧めだ。蒲台島唯一の食堂のイカリング・フライが絶品で、これを食べるため島へ渡る人も多い。長州島では、本島では見られなくなった古き良き香港に出会える。港の庶民的な海鮮料理店で腹ごしらえをしたら、航海者の守護神を祭る北帝廟 (創建 1783 年) を訪ね、昔のたたずまいが色濃く残る街を歩きたい。旧暦 4 月にはユニークな饅頭祭が行なわれる所以、祭りの日を確認してから出かけよう。

香港はグルメとショッピングの街。だけど少し足を延ばせば溢れるような自然があります。香港を訪れる際には、軽登山靴も持参してください。

【香港回帰 20 周年】

英國の植民地支配が終わり、香港が中国に返還されて 2017 年で 20 年となる。植民地香港に民主主義はなく国際貿易港における金儲けの自由だけあったが、「引き際の魔術師」と呼ばれる英國は返還前に民主化を少し進め、良いイメージを世界に残して去っていった。50 年間は高度な自治を保証するという中国政府の国際公約『一国二制度』は、「雨傘運動」の挫折 (2014 年) や書店関係者失踪事件 (2015 年) などで明らかに揺らぎつつある。香港のあり方を決める『香港基本法』は中国政府に解釈権があり、香港人にとって主権が英国から中国に移っただけで自分たちでは何も決められないのだ。知り合いの香港人女性には二人の子供がいるが、彼女はわざわざ米国へ渡って出産した。出生地主義の米国で国籍を取るために。体制がどう変わろうと、これからも香港の人々は逞しくしなやかに生きていくのだろう。

「防災グッズなんて、国が配ればいいのに」ランチ仲間が、平然と言い放つ。

そこらじゅう（熊本・大分地震、北海道水害、阿蘇の噴火降灰などなど）、災害続きの今年。「こんなのは初めて…」と、果然自失の被災者達のコメントが続いた。

「これまで…」の常識が、進行する温暖化のせいで、もう通じない。「いつ」「どこで」「どんな」災害が起きるものかわからない。だったら、いっそ、「国が一律に配布しておけば？」が、短絡的な彼女の言い分なのである。私は絶句。

いわゆる辛口作家の曾野綾子さんは「被災したからといって、じっと救援を待ち、『パンばかり続く』と苦情を言えるような国は、日本くらいだ」と言う。世界では、最低限の炊事道具（元々、持ち物が少ない）を抱えて飛び出するもので、石が3個あれば、それを竈がわりに、避難先で煮炊きを始めるそうだ。誰も救ってはくれない境遇での、ヒトが生き抜く知恵であり、基本なのだ。

ワンゲルOBでよかつたと思うことの一つは、幕営山行で学んだ、野外生活技術である。

さらには、地形の読み取り、方向の確認、安全な休憩箇所の見定め、日が高いうちの行動終了など、身についたレベルの知恵はいくつもある。これに、植物観察で増えた知識、百名山で広がった土地勘…などが、年金受給年齢になってからの楽しみと余裕を増やしてくれている。

また、山行の荷造りの際には、行程と季節・温度を考慮して、一品一品、持つか持たないかを検討しているものだ。体力がなくなった今は、昔以上に持ち物の吟味もすれば、軽量グッズの購入を心掛けてもいる。

もちろん、レスキューシート、ヘッドランプ、防水包装のマッチ、鏡などは、救助してもらうために、1パックにまとめている必需品だ。

そんな、山という非日常に入り込むための気構えは、そのまま自然災害への備えにも通じるところがある。自分の身は、まず、自分で守らねばならない。

だから、「国が配れば…」発言には、絶句！意味不明！！言語道断！！！

国豊かにして、山河暴れる（？）時代の、一般大衆の護身常識はいったいどうなっているのか？

佐藤愛子女史ならずとも、今日びの世間は腹立たしいことばかりだ。

NHKの天気予報は、春ちゃん、秋ちゃんのキャラクターも幼稚だったが、「傘を持て」だの「一枚余計に」だの、「洗濯日和」だのコメントも、お節介すぎる。ビミョーに、あなた任せ人間を増殖させていることだろう。

その一方で、どんな自然災害や事故に対しても、「避難勧告を迅速に出さなかった〇〇のせい」「侵入防止のための柵を設置しなかった△△のせい」といった訴えが出る。

しかも、それが通る！

超温室育ちの裁判官には「基本的な常識」が欠如しているのではないか？弱い立場側を支援することこそが、司法の使命で、拍手喝采をもらえると、勘違いしているのではないだろうか？

言葉尻をつかまえ、枝葉末節のことに中断してばかりの国会に、ののしり合いの米大統領選（執筆現在）に…。

先進国には、幼稚化ウイルスが、大蔓延しているのではなかろうか？

ということでこの夏、「大人の国」を見てきた…という話になります。

「自分の身は自分で守って下さい」

こんなあたりまえのことを、きっちり明文化し、具現化している国があるので。景色がどうの花がどうのより、これが、一番印象深かったことなのです。

それゆえに、虫に食われまくって痒くて熱っぽい腕が、野生に踏み込んだ当然の結果として、いつもよりは穏やかに、受け止められたのです。

実は、「おおまかで、大味の国」という先入観を持っていましたから、カナダは、行き先の選択肢にはありませんでした。

「ご希望のツアーは、かなり成立が難しいです。翌日発の『レイクルイズと、アシニボインロッジ9日間』なら、あと一名で成立しますよ」と言わされての、突如浮上の行き先でした。

どこを願おうと、ツアーが成立しなければ、凡人は異国の山には入り込めません。こんなふうに、「行き先」が一番のきっかけになっているはずが、簡単に反対方向に飛ぶことにもなるのが、海外トレッキングというものです。つまりはツアー会社の深読み通り、「その時期に、その客は、海外へ出かけられる状況にある」の方が、実は根本的な動機にあたるのでしょう。

まさにその通りで、予算がポンと倍になるため、30分ほど逡巡してしまいましたが、結局OKの電話を入れました。きっと、これがご縁というものなのだ…と、考え直したのです。

実は、カナダを敬遠していたのは、花の時期がヘリ入山で提案されていたこともあります。

そんな贅沢で、怠けた入山はできない！そんな傲慢な人達との旅はしたくない！…が、これを知った当時の私の潔癖さ（？）でした。

ただ、後述するような事故（1月の右上腕骨頸部骨折）のせいで、そんなことがいつまで言えるのか…と謙虚（？）になったのです。喰わず嫌いをやるような残り時間があるのか？これから、もっと怪我や病気やの時期に入っていくのだしつと、30分の間に反省（？）したのでした。（加齢が、だいに判断基準を変えていくものなのです。）

さて、広大な大地が広がるカナダの国立公園を訪れるには、まず入園料が必要です。また、資格取得ガイド同行の義務や、さらにはアクティビティの内容による、引率人数の細かい規定や、入山者数制限もあります。それらは、人間が自然に与えるダメージを最小限にとどめ、貴重な自然を後世に伝えていくという考え方に基づいての規定です。そのうえ、コースによっては、WAIVER（ウェイバー・権利放棄書面）への署名を求められます。



《Mt. アシンボインとレイクメイゴック》

現地ツアー会社が、保険会社と契約する際に、参加者に対して「自然の中での不確定要素と危険の存在を知らしめ、認識させる書面」を渡し、現地における法的な権利放棄（損害賠償など）条項を含む書面に署名させたうえで…が、締結条件になります。この背景には、北米やカナダでは、野外でのアクティビティに対して、強固な自己責任論があるためとのこと。

「そう承知されたうえで、お客様と日本のツアー会社には、日本の法律による旅行契約が締結されており、そちらでの義務履行は行われるのでご安心を…」が付記されていました。

日程をおっての詳細は、私的な紀行の方にまとめました。ここでは、野生動物との共存にだけ絞った話としましょう。

日本でもヒグマ出没の北海道には、フードロッカーなる小型ドラム缶のような物が設置されています。でも、既に、心得てこれに執着するヒグマの写真も見ています。

カナダでは、野外の、一般収集対象のゴミ箱までが頑丈な金属製です。人は逆手で簡単にロックを外し、気軽に利用できます。でも、この「逆手」が、熊には決して出来ないポーズなのです。順手でどう叩こうが、振動させようが外れることはなく、熊はこれをあさることを諦めます。一方で、子供達も、こんなゴミ箱を使用することで、日常に熊が共存していることをわきまえるのです。

キャンプ地も同様のごみ箱があり、炊事場にはまさにロッカー仕様のフードロッカーが設置されています。

テント内に食糧を置いたまま…はありえません。テントサイトには、遊具のようなポールが立っていて、食糧は宙づりにしておきます。こんなポールがない場合には、立木と立木の間にロープを渡し、その中間からぶら下げます。何も餌をとれないとなると、熊がわざわざテントサイトに寄り付くことはなくなるのです。

日本なら、ルールを破ったり、杜撰な人が必ずいるものです。でも、野生動物が現実に周辺をうろついていますので、それを常に意識しながらの行動になるのです。そんな緊張感を忘れない…こそ、「素晴らしい！綺麗！」以上に、自然公園で学びとるべきことにされているようでした。

氷河湖の岸からは、何本ものハイキングコースが伸びていますが、その出発点に、その日の熊出没情報が掲示されています。「4人以上で入山」



《野生動物を寄り付かせないシステム》

などのランクがあり、罰則もあります。ここでも、野生動物の方が先住者であり、そこへお邪魔していることを忘れるな…なのです。

それこそ、野鳥を紹介のように、熊も、このあたりに生息する動物として看板に描かれているだけです。

ガイドは「ここで、クーガ（アメリカライオン）を見たこともある」と言っていました。人間様などお構いなしの、もともとの生態系が、そのままに維持されています。

その食物連鎖に本来入っていない人間は、「人の一行が通るぞ」のサインを出して、用心しながら、通過するのです。

タンザニアのサファリでも、生き生きと暮らす動物達の姿に感動したものでした。でも、そちらは、安全なジープに乗り、専用車道を走るだけなので、結局は隔絶されているのです。

こちらは、生き物の気配を間近に感じとりつつ、自分も同じ空間を歩いて行動するわけですから、サファリとは別次元の、自然どっぷり感を覚えました。

そして、目的の花は…スケールが違いました。短い夏の間に子孫を残さねばならないですから、過酷な環境ほど、「今だ！」と咲き誇ることになります。

しかも、州立公園ということで、「オフトレール」が楽しめました。「人と同じ場所を歩かないで下さい」が保全のためのルールになり、ガイドがおおまかに示す先までは自由歩行。自分も野生動物の一員のような目線を持っての踏み分けとなりました。ふだんの、路傍からの花探しとは、雲泥の差の環境で、花園満喫の時間でした。

今回行ったのは、定員 30 名で、3 日連泊を原則とするロッジでした。指定日に次々とヘリで入山し、4 日後にまたヘリが飛んできて、次の3連泊客と交代します。超人気で、ハイシーズンの予約は一年待ちとの噂もあるそうです。（「地球の歩き方」に紹介されていないのは、そのせい？）

Mt. アシニボイン (3618m) は、カナダのマッターホルンとよばれる山容を持ち、氷河もかかりえています。アシニボインロッジは、氷河湖レイクメイゴックを挟んでの対岸にあり、周囲のキャンプ場や、自炊棟も管轄しています。

ボウ・バレー・パークウェイから 1 時間くらい走ったところに大駐車場があり、そのヘリポートから搭乗して、一気に、このアシニボイン州立公園のど真ん中に降り立ってしまいます。

眼下に見下ろした手つかずの広大な森には、日本なら見えるはずの林道など、一切見当たりません。ここへ来て、目的地まで延々と伸びる林道が、どんなに途中の自然を破壊していることか、それが補修されずに浪費に終わっているかの愚かさにも気付かされました。

必要な人が、必要な場所へピンポイントに移動する…なんと自然に負荷をかけず、無駄のない交

通手段！かつて、ヘリは贅沢としか捉えなかつた自分は、未熟だったと反省しました。

さらには、快適なシャワー室、洗面所などの清潔な水回り、3日サイクルのお洒落な食事に、自家製のパンやケーキ類。朝食後はテーブルに食材がずらつと並べられます。客は、好みのサンドイッチを作り、クッキーや果物も小袋に入れて、周囲のハイキングに出かけていくのです。

そのように、居住スポットは清潔・快適でありながら、一歩外へ出れば、最低限の道標が設置されただけの大自然がそのまま。「どうぞ、自己責任で動いて下さい」になっている…。なんて、スマート！！

大昔は3K(きつい、汚い、臭い)の代償として、極上の自然は味わえるものでした。私も、まだその手の偏屈をかかえています。今また山ブームと言われてはいますが、他の動物との共存や、自己責任意識は抜けたままで、「きれい！」「健康的！」だけが強調されているようです。

そのうえ「自然は、タダが当然」と、入山料への抵抗も強いようです。

一方、カナダは1億円以上かかるというワイルド・オーバーパス（野生動物用の横断橋）をハイウェイの随所に設置したり、公園レンジャーがレンジャーhausを巡回して、生息調査やトレールの補修にあたっています。言葉の判るヒトの方に「自分の身は自分で守りなさい」と警告し、「損害賠償はしません」のルールで、厳しい自覚を促しています。

カナダ方式から学べることは多いように思いました。

さて、その「自分の身は自分で守れ」ですが、生身の体は衰え、反応が遅れていくものです。

実は1月25日の志賀高原で、まったくの自己責任=リフトからの降り損ないで、右上腕頸部骨折をやってしましました。

保存療法で修復を待ち、つながってからリハビリへ。全くのわが身のドジで、補償など思いもつかぬことだったのに、スキーツアーコンサルティングの保険から補償が出ることになりました。半年

の「通院補償」に「見舞金」。さらに、肩関節が拘縮したせいで、「後遺症障害補償」も受け取ることになりました。

「後遺症障害補償」については「別に、診断書を出して頂きますが、審査の結果出ない場合もあります」との、事務員の弁でした。こんな大怪我も初めてなら、これが老後にどう響いてくるかも未経験。この時点での証拠をこの際残すべきだろうと、可動域を計測してもらい提出しました。

音沙汰なしで却下されたものと思い込んでいたのに、なんと10月に入ってから、ちょっとびっくりの額が振り込まれました。まさに、「体で稼いだお金」！！

（こんなアブク銭は、海外トレッキングに使うに限ります！ウフフ・・・）

100%自分のドジで怪我をしておいて、こんな時の障害保険をかけておくという自己責任もやらないで（レスキューバーなら入ってます！）、後遺症障害補償金をせしめてしまった私…。

これって、苦情への対応に鍛えられた国、日本だったからのことですね。

臆面もなく訂正します。日本は、ドジな人にも優しい、至れり尽くせりの、とても素敵な国だと思います！！



《キャンモア郊外で夏を楽しむ家族連れ》

およそ30年ぶりの穂高岳山行記録

24期 仲村 正一

1979年、金大ワングルに入部した年、夏合宿は裏銀座及び穂高岳コースの山行でした。一年のときは何もかもが新鮮で、あたり一面ガスでも山歩きは楽しく感じられたのを覚えています。烏帽子岳から槍ヶ岳への縦走を終え涸沢ヒューテで野営したときは、連日の雨で一日目の北穂高岳、二日目の奥穂高岳と前穂高岳には登れなかつたことを覚えています。



その後上高地に旅行で来ることはあっても穂高岳に登ることはありませんでした。登れなかつた山のほうがピークを踏んだ山より覚えているようです。体力があるうちに一度は登りたいと思っていた穂高に今年無事登れたのでその報告をさせて頂きます。

8月1日から登山のために4日間の日程を組みました。今回は家族登山ではなくテントも背負った登山です。

天気予報では、曇りまたは雨の予報で、一度は登ることをやめようと考えた初日でした。平湯の沢渡駐車場に到着したときには雨が降り始めました。ここまで来たのだからと上高地行きのバスに乗車しました。途中から豪雨に近い雨が降り始めましたが、上高地到着のときには小雨まで回復しました。

日程的に混みそうな土日を避けた山行だったので観光客は少なめでした。それでもかなりの方とすれ違い挨拶を交わしました。予定では横尾まで3時間の行動だったのが徳沢あたりで小雨が激しく降りだしたので初日はここで野営することに決定。

見回すとかなりの数のテントも張られています。

ザックの中のテントは大学を卒業してすぐ

購入したおよそ30年前の3人用ダンロップ製テントです。



金大ワングル時代には三角テントのフライは軽量化のために張らなかつたこともあったことを覚えていますか？



このテントも軽量化のために何回か使用するうちにテントの上に張るフライが紛失していました。そのために、夜中から激しく降りだした雨によってテントの中では小さな水しぶきが舞い散り大変な状況となってしまいました。テントの上にはフライは必ず張るべきだと心底思った夜でした。そんな状況では心は少し悲観的になります。テントの中にいるときは、明日帰ろうと思っていました。

しかしその朝あたりが明るくなるともう一日先に進もうという気になり、2日目の登山が始まりました。天気は曇り模様で晴れるかどうかわからなかつたのですが横尾山荘の前にかかる吊橋を見た途端登山の意欲がわき起ってきました。高校山岳部らしき登山者の姿も見られたのも更に進もうという意欲を盛り立てました。最近は韓国からの人が多いようで何パーティもの登山者を見かけました。後で調べてみると韓国の山は高くても千数百メートルで日本の山に登りに来る人が多いようです。

運動不足も少しあってか4時間の行動予定が1時間ほど伸びました。しかし個人山行のいいところは自由に休憩時間取れるところです。50分に10分の休憩から20~30分に1回の休憩へと行動時間を短くし、なんとか涸沢ヒューテに到着できました。



2日目の野営は、近畿大学付属高校の近くで、とてもにぎやかでしたが、夕方近くから雨が降り始め、明日の予定が・・・。しかも霧の中、遠くで落石の音が聞こえ不安ムードを盛り立てます。

テント代は一人千円と少し高めですが、水は水道から汲み放題な上に有料のトイレも無料になります。北アルプスでは近年自然環境保全のために有料トイレが増えているようです。お金はかかるけれども綺麗なトイレのほうが気分よく使えます。

3日目は3時起き。登山意欲満々で、さらに外は見晴らしの良い状態。穂高岳山荘を目指して登り始めました。あくまで単独登山だったので慎重に進んだのですが道にマーキングをしてあるとはいえ、間違えることもありそうな感じでした。よく踏まれている岩とそうでない岩は見分けが簡単につきますね。

幸い見晴らしが良かったため、途中でコースを少し外れることはあったのですがザイテングラードの取付きまで無事到着。ここでは数パーティとすれ違い待たされることもありましたが、午前7時近くに穂高岳山荘前に到着しました。

かなり疲れてふらついているように見られたのか、「ヘリコプターが物資を運んでくるから一時山荘に待機していくくれ」といわれました。

ヘリコプターが近づくとかなりの風圧を受けます。風圧で小石でも飛んだら怪我をする

ような場所です。風圧が原因による落石の音もしていました。



ヘリコプターが無事物資搬入を終えたあと、登りだしがかなり気合の入る場所でした。1時間の登りでなんとか奥穂高まで到着。30年来の思いを達成できました。



西穂高からジャンダルムを通ってくる道はかなり険しく感じられます。

携帯電話を使っている人がいました。それならと自宅に電話してみると奥穂高岳山頂からはスマートフォンが使えました。徳沢では使えたのですが涸沢ヒューテでは使えなかつたのですが見晴らしがいいところでは使えることもあるようです。

天候の変化を考え北穂高岳へと進むのを今回はやめて早めに帰ることにしました。最近少しバランス感覚が薄れてきて歩行ポールが大いに役に立つ年齢になってきていたのも理由です。

最終日、天気は回復に向かい良くなっています。沢山の人が涸沢ヒューテに向かって登っていました。マラソンよりもちょっと危険ですが場所とペースを考えれば登山も楽しみながらできるスポーツとなってきています。無事登山でき最高の休日でした。

仏陀の道を旅する

8期 篠島 益夫

2016年2月から3月にかけての2週間でかねて希望の仏陀の道ツアーに参加して釈尊の昔に思いを馳せながら北インドとネパールの地を仏跡を中心に旅して参りました。

成田からデリーまで空路約6000キロ、デリーから国内線で約680キロのバラナシへ飛び、以降はバスで初転法輪の地、鹿野苑・現サルナートから成道の地・ブッダガヤを経て、北インドとネパールの仏跡を巡る約2000キロの旅、デリーから成田に戻る14日間の旅でした。

日本画家 野生司 香雪	寄贈	ムガランダクテイ寺院 お釈迦様の生誕から入滅までを壁画に描いて	鹿野苑・現サルナート 初転法輪の地	二月二十二日
----------------	----	------------------------------------	----------------------	--------



読經する人もある 五体投地で礼拝、	マハーボディ寺院 (世界遺産)	ブッダガヤ 成道の地	二月二十四日
----------------------	--------------------	---------------	--------



王舍城・現ラジギール	靈鷲山(鷲の峰) 頂きの説法広場には鷲に似た大岩がある
無量寿經説法の地	王舍城(往時のマガダ国首都) 觀無量寿經説法の基となつたビンビ
サーラ王とイダイケ夫人の悲劇の地	

二月二十五日



1. インドの概要

- ・自由資本主義国（有権者8億人以上）・
- 人口12億以上
- ・面積　日本の約10倍
- ・言語　公用語ヒンズー語、第二公用語英語

2. 釈尊の事

釈尊（釈迦牟尼世尊）、お釈迦様、仏陀と言われる方

現在はネパールまたはネパール国境に近い北インドの当時の大国コーサラ国の属国でカピラバストゥ城スットダーナ王の王子・ゴータマシッダルタ（BC463-383年 80歳の長命の方）

29歳で城を脱出、出家して35歳で成道される成道後の釈尊の教化活動地

現在のウッターパラデーシュ州、ビハール州、ネパール南部の北インド地域（日本全国の2倍ほど）

当時のインドは中国の春秋戦国時代のように諸氏百家のような諸思想、宗教の輩出が集中した時代であった

二月二十八日
クシナガル大涅槃堂
 カツクター河で沐浴され、クシナガルに赴かれた釈尊は二本並んだサーラ樹の間の床で頭北面西右脇臥で涅槃に入られた



ネパール・ルンビニ苑
釈尊のお生まれになつた所
 誕生館の内部は撮影禁止、イスラム侵攻時にマーヤ夫人も 幼児の釈尊のお顔が削り取られ痛々しい



二月二十九日
ネパール・ティラウラコット説
カピラバストゥ城
 釈尊が二十九歳まで過ごされた城、四つの城壁も半ば埋もれているが出家されたという東門も発掘中



三月一日
シュラバステイ祇園精舎（サヘート）
ガンダクティイ僧院跡
 釈尊が雨安居をよく過ぎされた場所 大規模な僧院、尼僧院跡が残る
 阿弥陀経説法の地



仏陀ご自身の活躍された時代はBC463年—383年とされており、地域としては現在のインドではビハール州、ウッターパラデーシュ州や隣国ネパールに及ぶとされており、ヒンドスタン大平原の地でガンジスの大河とその支流に恵まれて昔も今も豊かな農業地帯である。

しかし、インドの経済発展からは取り残されており、酷い貧困と格差がどこでも目立っていた。特に義務教育がないので識字率も76%と言われ、国民の四分の一は字が読めない、男女差別は目にも明らかでホテルにも女性従業員がいない。

私は現在、中央仏教学院の通信教育生でもあり、仏教の発祥の地である北インドを体感しておきたかったが、仏教発祥の北インドの地は昔から豊かな実りの大地であり平和な宗教が生まれたのかもと言う同行者もいた。

確かに世界の三大宗教の中では戦闘殺戮によらずして教義が拡大したのは仏教だけと言っても良いだろう。

終わり

近年の、外国での記憶から：承前（昨年の続きを）

11期 長岡 正利

『やまと』昨年誌につづいて、近年の写真を紹介させて頂きます。なお、遅れての投稿で、編集長 森様と実務担当・谷内様(デザイン・プリーズ社)には大変お世話になりました。

その6：パキスタン・カラコルムのスパンティーク峰(7027m)BCへの、チョゴルンマ氷河トレッキング

米国 2001.9.11 テロ以来自肅していたパキスタンでしたが、久々にカラコルムへ行つきました。いつものパキスタン航空ですが、早めに機内へ入つて、「しまった！乗る機を間違つたか？(@@)」パキスタンで、ベールなしの女性が笑顔で、というのは、以前には全く信じられない眺めでした。



山間部の人たち。チョゴルンマ氷河(前方にスパンティーク)歩きでは、時にクレパスを避けて。



スパンティーク BC は、下写真の左山影の先。

その BC に立って氷河下流を。



山奥にも男女共学の学校が。驚いたのは、都市での若い女性（むろんイスラム教徒）は、もう頭髪を隠さない。もっとも、そのスカーフは首に掛けてはいます。同国最大のファイサルモスク内で。



以上、詳しくは、KUWW-OB 近畿 (<http://www.kinki.kuww.org/>) の、次 URL にあります。

<http://www.member.kuww.org/nagaoka/slide20140704.html>

そのうちのヨコ長写真(下はその1つ) クリックで、氷河上などでの全周写真を楽しめます。

<http://urx.blue/A08C> (画像調整と Web 掲出は、11 期加藤様による。)

その7：タイ東北部からカンボジアのクメール文化圏へ

2015年5～6月は、前年のタイ北部仏蹟巡り（前号ご参照）に続いて、タイのバンコクから、カンボジアの首都プノンペンまで陸路をたどりました。春のこの地は、乾期・酷暑の、連日の快晴。

バンコクはいつ行っても喧噪の都。これがまた、仲々嬉しいのです。



駅市場では列車が来ると屋台はササッと両側へ。繁華街でもお坊さん托鉢と、新製品の街宣。

屋台でも使い捨て手袋で衛生的です。仲々美味しい。右下は、市内スタット寺の寄進佛。



カンボジア国内の方では、ラチピーナーさんに同行して貰いました。大変な努力家の才媛でした。

遺蹟が大きいので、大きさ比較のためにちょっと立って貰っての。



カンボジアの田舎での昼下がり：「おい、日本から来たオジサンが写真撮りたいと言ってるぞ。」

「え～、やだなあ」「まあ、いいかあ」「どう、綺麗に撮れたの？」



のどかな旅でした。



石川・福井県境の取立山から見た白山。左端に手取川ダム湖と、右は別山。

その8：2015年3月には、日本山岳会のフォーラム（公開講演会）「登山を楽しくする科学」で

「白山を歩いてーその花々、火山と地質、白山信仰と山麓での暮らし」と題してのお話しを。会場での配布『予稿集』PDF版は、次に：<http://urx.blue/A0qN> その後にも何ヶ所かで。



「ハクサン」を冠した、代表的な高山植物。左から、白山小桜、白山一花（イチゲ）、白山石楠花、白山千鳥。

白山で有名な黒百合。



白山の下山仏。白峰の林西寺「白山本地堂」内：十一面觀世音（重文：平安後期）と、山頂にあった十一面觀世音。
このように、白山の本地仏は良く遺された。

藤原秀衡寄進の、石徹白の虚空藏菩薩（重文）。

（白峰の林西寺様と、石徹白大師講（上村様ほか）のご好意により撮影。）



白山は、泰澄が開山してのち、天台密教と関わりの深い修験の場として栄えた。しかし、一向一揆の激化の中で白山麓十八ヶ村の寺院は淨土真宗となるなど、北陸の密教系寺院は激減した。

写真は、真言密教の古刹、礪波梅檀野の千光寺の両界曼荼羅と、その胎蔵界の部分拡大。右は、一向一揆の際に土中に埋められて焼死を免れた平泉寺の聖観世音菩薩（平安末期）。 （千光寺様と、平泉寺・乾様のご好意により撮影。）



白峰大道谷、五十谷の出作り。左は農耕が行われていた頃。やがて、耕作放棄されて茅原となり、今は植林された杉が育って、むかしの五葉松の梢が杉の樹間に僅かに覗くのみ。

来年は、白山開山から1300年です。伝承によれば、泰澄さんによる開山が養老元（717）年。

ではまた、この続きを、来年の次号にて。

なお、KUWV-OB会のHP中の、「会報Web版」からご覧頂けますと、カラーでの閲覧が可能です。

編集後記 *****

皆様のご協力によりOB会会報「やまと」vol.31が今年も年末発行にこぎつけることができました。OB会活動報告、同期会便り、現役よりの報告、投稿・・・。小屋作業ページには、歌も鍵の問題などもありましたが、高三郎へ再び道が復活しようとしています。小屋作業に参加して下さった皆さんありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

本号に原稿をお寄せいただきました皆様に心より感謝申し上げます。また、これからもOB会、現役の皆様の安全な山行と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

たっぷりお楽しみください。

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会 会報誌「やまと」vol.31

発行日 2016年12月

発行者 久富 象二（OB会会長・20期）e-mail chmxm643@ybb.ne.jp

編集・印刷 デザイン・プリーズ

OB会事務局 〒921-8174 金沢市山科町274-13 森 恵利子（22期）

TEL (090)1310-8615

e-mail (PC) mori2000@sr.incl.ne.jp

(携帯) erieri-8615@r.vodafone.ne.jp

OB会ホームページ <http://www.kuwv.net> 管理人／奥名 正啓（15期）

OB会費払込口座（口座名義：金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会）

郵便局（通常払込） 00780-3-14120

ゆうちょ銀行〇七九支店 当座預金No.0014120

北國銀行本店 普通預金No.223703

《事務局から》

- OB会は皆様のOB会費で運営しております。今年度は会費未納の方のみ「会費納入のお願い」を送付させていただきました。ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。
- 住所が変わられた方は、お手数でも事務局 森 (mori2000@sr.incl.ne.jp) までお知らせいただけますと幸いです。また、お知り合いのOB会員の住所変更をご存じの方がおいででしたら、上記、事務局までお知らせください。特に、各期の代表、窓口になっておられる皆さんのご協力をお願い致します。
- 奥名さんから定期的にe-mailでOB会通信を配信していただいております。配信をご希望される方はご自分のメールアドレスを奥名さんまでお知らせください。
※奥名さんのメールアドレスは ma-okuna@nature.email.ne.jp です。
- 事務局ではやまと原稿として、皆様からの近況報告を随時募集しております。同期会の集まりや、個人の山登りなど、団体・個人を問わず簡単な報告で構いませんので、事務局 森 mori2000@sr.incl.ne.jp までお送りください。お待ちしています。